

の平治を得させられしが故に、ことさらに稱擧し奉るべき蹟としては多く見えさせ給はず、その跡なきぞ、中々に盛徳の至りたるきはみなるべき、

一、御在勤三十年餘の間、江戸登城謁見の式等、つひに塵ばかりの失あらせられざりしなど、いともありがたかりける御事なりきと、年久しく御城使つかへまつりし老人の涙たれて物語をりき、恭謙を第一とせられければ、公務いさゝか怠り給ふ事おはしませざりきとぞ覺えし、

一、御襲封の初より、諸規式の事ども、有司くよりまらべ奉れるを御覽じては、御先代にかはれる事どもやなきと仰られて、聊も先格を違はせ給ふ事おはしませず、殊に靈威院君の御跡をふませ給はんの御心ふかくおはしませしぬ、奥さまの御事にても、年ふりたる女房ごもに、先代の御おきて見き、傳へたらむをば聞しめす事、いとも懇なりし御事なりきとぞ、

一、常に御勤孝をむねとし給へば、

諦了院老君、蓮性院大夫人に事へさせ給へる事のうへにても、げやけく擧稱へ奉らんは中々にて、たゞ數十年の間の御孝養一日の如くかはらせられざりしこそ、最もめでたかりし御事なれ、されば五節句朔望等の登城の御歸るさには、必ず白金の館に参りたまひぬるに、寒暑のいみじきをり、風雨のいたくあれぬる時には、かの御方より今日

はな入らせ給ひそとの御使ありき、これさもおはしませねば、御厭ひなく参り給ふが故の御心づかひなるべし、

一、弘化二年の春、江戸青山より火出て延焼に及び、白金邸第も焦土となりぬ、大夫人には先づ假に目白臺なる新邸に移らせ給ひ、白金邸館を造らせ給ふほど、君いたく御心を盡させ給へり、いかで速につくり出してよ、大夫人には、ことに雷をきらはせ給へるに、目白館はかりそめなる所にて、御心もやすからじと思召せば、かねては儉約をむねと守らせ給へども、此度の事は、費用を増して、早く作り出してよと、おきてし給へりしほどに、初め工匠等が積り申し、は秋も半に至らずば落成せじといひしに、思ひの外速に成就しぬるは、ひとへに君の御眞實によれるなりとぞ申あへりける、君の萬に御心もちひたまへる御有様を、一橋家の御内にて、年老いたる女房達伺ひ奉りて申ししには、あはれ蓮性院君には、いみじき御果報こそおはしませしけれ、守殿のかほどまで御孝行ならむには、實の母子も及ばじやむごとなきかたぐはうは、への親しみこそあれ、かたみに打とけさせがたかめるを、此殿の御中らひには、さる御有様つゆほども見えさせ給はぬなりと感じあへりきとぞなん、

一、君宇土にいまし、時より、専ら文武を學び給ひて、鳥獸草木の類、其外の玩弄の物を近づけ給はず、宗家御相續になりては、宿儒辛島才藏が致仕し居けるを、優に徴して、再勤

せしめ給ひ、葉室直次郎侍讀につかへ奉るなどをばじめとして、經傳軍理の講義を聞しめす事等、終身廢し給はざりき、書を能し給ひ、馬術に長じ給へる事等は、ことさらにたへ奉るに及ばず、君はやく父君にわかれ給ひしに、御母君榮昌院夫人の、うちくの御さとし殿にまし／＼しに順がはせ給ひしまるしおはしまして、政事のうへにもめでたき御事どものあらせられしなるべしと、久しく咫尺し奉りし、大槻彈藏などは、現に伺ひ知り奉りし事もありきと、なんされば常に容體溫良、威嚴を兼させ給ひ、奥殿燕居の時に、袴を脱がせられざりしを、有吉市郎兵衛此時御間を得て申上げ、るは、前々の殿にも、かゝる御時には袴を脱ぎ給へりし、君にもさあらせられんこそよろしからめとありしに、いはけなき時よりのならはしにて、却てこゝろよきはどのたまひし、これ等全く殿母君の御教訓の及ばせ給ひしにこそ、

榮昌院夫人の御事を竊に伺ひまつるに、御本性真正におはして、常にからやまこの古き正しき書を見そなはし、御座所には、まかるべき書籍のみありて、玩弄の物なく、男子の室の如くなりきとぞ、世に賢夫人と稱し奉りしもうべなり、前世子前永田町支邸より、本邸に移らせ給へりしは、年僅に八つの御時にて、ひわづなる御身なりしに、はや詩經をよく讀み給ひしとぞ、是れ殿祖母君榮昌院夫人の御さとしならずば、いかでかくはおはしまさむやと、傳奉りし清成八十郎など申あへりし君の未だ

幼くおはしまして、時、御側につかふまつれる少年に、蕃椒を喫せ給へりしを、御母夫人聞しめして、上下共に人にかはる事はなきをこて、君にも蕃椒を嘗めさせ給ひしとぞ、これにても、夫人の殿訓はかり知り奉るべし、（編者云、夫人の事蹟は「谷の忍ぶ」といふ書に委し）

一、宇土にいまし、時は散樂の舞ならひ給ふ事なかりしを、諦了院老君の御心なぐさめに、近侍に能の舞をならはしめ、君にも勸めまゐらせらる、初め好まれざる事ながら、喜多に就て學び給ひしに、不日に驚くばかりによくしえ給ひしとぞ、それより後は御心やりのひとつとはなし給へり、

一、また宇土にいまし、時、江戸にて森越中守殿の許に、かた／＼集はせらる、事ありしに、主人宴興を添へられんとて、鳥銃の伎をなす者をして、角的をうたしめらる、一座の中には、放發の機關しらぬ人もありて、ひゞきに驚くばかりの人も少からず、君には西國におひ立ち給ひ、必ず狩などにもなれ給ふらむ、いかで一發をと、主賓共に乞ひ申されしに、初はいなみ給へども、強て乞はれければ、さらばとて、はじめ放發しぬる者に習はせ給ふ躰にもてなし給ひ、三度はなち給へりしに、三つながら正鶴をはずさせ給はず、滿座嘆賞しあひしとぞ、こは宇土御内人有井一馬が物語なり、

一、君尤も鳥銃の伎に長じ給ひしかば、常に御獵の幸多かり、野にあされる雁をあゆみよらせ給ひながら、ねらひ發ち給ふ、其機の迅速なること、人の及ぶきはにあらざりき、

一、臂力殊に勝れおはしませり、然れども、自ら誇らせらる、事なし、たま〜御酒まゐりたる興にまかせられ、御心おかせ給ふ者も侍らぬをり、碁盤よりは厚く重しの片脚をとりて、御目の上にあまた、びさし上げなごし給ふに、聊勞し給ふ御氣色おはしませず、或時綱利君の御肩入弓とて、普通にこえたる大弓を御側にたて置せられしを、近侍の若輩等引き試んとするに、面を皺め體をふるはしても、何のあたりまでも引得ず、それも再度とはなし得ぬを、君には何の御力いれ給ふともなく、七度八度つゞけざまに引しをらせ給ふ、此弓の事は、重賢君にもいとたやすく引かせ給ひしを、唐僧が見て驚きまつりしといふ事、同君の御遺事にも載られたり、又或時西洋銃の鐵丸、廻り尺もあるべきを、近侍の若輩、頭上にさ、げむとするに、皆膝をかため、腰をすゑ、一身の力をきはめても、えあげざるを御覽じて、それこ、にこのたまひて、肩衣めしながら、御片手もて十回ばかり指あげ給ふに、いさ、か勞し給ふ有様おはしませりけり、か、れば凡そ普通の者の力二十人がほごはかねさせ給ひぬらむとこそおしはかり奉りぬれ、

一、御馬めし給ふに、かりそめにも、御形をくづし給ふ事おはしませず、手綱とり給ふ手もと殿にぞおはしませしける、いつの年の初にか、御乗初の日、關東馬に涼風と名づけられしをめし給はんとあり、此馬はいと能く足かきもこ、ろさかぬさまの風情なれば、御馬役ごも、こはおかせ給ひて、他のこそはと申上しかご、たゞその涼風牽出でよとの

たまふゆゑに、止事をえす奉りしに、責め給ふにつけて、足なみ常にかはり、あはれよき御馬かなと見奉るほごなりしかば、御馬役のごもがらも、皆我を折て感じ奉りぬごん、

一、御心やりには、養禽盆植をも愛し給ふといへども、必ず珍禽奇類の價貴き物を求め給はず、只世に有りふれたる物のみにして、鳥は雛を生育せしめ給ふを慰ごはせられぬ、草木の盆を朝夕に移し置せらる、中にも、殊に重きは手づからなし給ふ事常なりけり、

一、御中年より、菊を愛でおぼし立させ給ひ、近侍の中、それらの事心得たる者に命せて、江戸にては、平井新田の別業にうゑさせられ、花の時御園にうつさしめ給ひ、其種を御園の御園にもうゑしめ給ひけり、か、れごも、聊も費なからむごにぞ心を用ひられける、結ひ立るませ竹も、年々に取かへさせられず、古きをかこひて、足らざるをのみ補はせらる、花の銘するさせらる、木札も、新に作らしめたまはず、不用になりぬる文箱やうの物のそこなはれたるなども、つぐらしめ給ふ、玩物に費をかけさせ給はざる御心もちひは、偏に重賢君の跡にしたがはせ給ふなりけり、

一、江戸御往來のをりに、橋のうち、に小さき花瓶をおかせられ、時々の花を折りとり、さし給ひて、慰ごせられぬ、ある時、中國路にて、歩侍の中より、君のかく花をめでさせらる

るを伺ひ知りて、山櫻のや、大きな枝を折り来て奉りしかば、こはいかに心得ぬ事をしつるかな、是は花を愛するにてはなくして、花にあだしつるなりとて、御心にかなはせられざりき。

一、御製封の初より、政事に怠らせ給はず、言路を開き、温厚寛裕をもて待せらる、により、仕うまつる者も、言を盡し易かりけり、常に忿悲の色をあらはしたまはず、たま／＼御旨に忤ふ事ありても、其後は元に變らせ給ふ事なかりき、か、れば、下よりも怨み奉る事あらず、殊に監察の言を納れ給へり、たとひ議定せしめ給ひしことを變させ給ふ事などのあるは、監察の言によらせ給へるなり、

一、重臣を待せらる、こときはめて優におはしましき、政事の間を得させられては、月花のをりにふれて、奥殿に筵を設け、又は水前寺或は川尻の漁舟等に召供せられ、ことに江戸にては、遠情を慰め給ふみ心にや、一入にいたはり興をつくさしめ給ひ、石小田新田にては、放鷹釣魚をも許したまひたりき、

一、江戸のゆきかひはさらなり、いづくへわたらせ給ふにも、御供つかふまつれるものごもの勞をいたはらせらる、御心ふかくおはしましけり、夏のいどあつき日にも、乗物のうちにて、扇ならし給はず、冬のいみじう寒きにも、御手を爐にあて給はず、煙草をもめさ／＼りけり、さりとて、火爐煙草の具奉らざるにはあらず、こは御供に立ぬる上下の

ものごも、さる事すべきならねば、御身のみ安らかにおはしまさじこの御心づかひなるべし、漁獵のをりとても、まかなり、嚴寒の節、筒網取あつかひぬる近侍の勞をおぼしめしては、御自らもいさ、か御手などあた、め給ふ事なく、御網の時は、屢、御手を水にひたさせ給ふ、また江戸往來の長途にては、外様のものにも、程々によりて、詞かけ給ひ、年久しく仕へ奉れるには、特に名を呼ばせられて、勞を慰め給ふ事おはしましぬ、又新役の者には、其程に應せられ、御用命じ給ひ、ごにかくに勤めくるしまぬ様にこの御心づかひおはしましぬ、江戸はさらなり、いづかたにても、公家方を初め、幕府の權家等に御行逢の振合等おろそかならざる御事にて、すべて役々の職掌を心限りに盡さしめ給へりしかば、いづれも能く差はまりてつかへ奉りぬ、是等の事は、御供方にて、年久しくつかへ奉りし人々の話なり、

一、或時、江戸にて、妙解院に御參詣ありしに、院主あるじ、てのどやかに御物語ごもありしかば、御歸りは夜になりぬ、さて御側の衆より、御乗物は玄關の上にかきあげさせよ、そこより直にめし給はんと、の事なりしに、その事つかさされる松田覺兵衛思へらく、是は必ず君の御心にはあらし、大かた院主の心いれなるべし、さりながら、いかで此寺にいらせ給ひて、禮儀缺せ給ふ事おはしまさんやとて、うべなはずして、例のま、にぞつかふまつりける、かくて御乗物ちかく御供に立ち侍りしに、御詞かけさせたまひて、

夜もふけぬ、いかにこうじたらむ、寺詣の歸さには、少し似つかはしからねど、眞夜中なれば、苦しからじ、このごろ獲つる鳥あり、それ賜ひてん、必ずあらはに禮など申すに及ばぬぞと宣ひ、御歸館のうへにて、其鳥を下し賜はりぬ、こは寺にて御乗物の事をまろしめして、御心に叶はせ給ひての事ならむと、竊に思ひ奉り、いともかたじけなかりける事なりきと、覺兵衛申しぬ、

一、冬のいみじう寒き日の御獵に、獲させ給ひし鳥の、河中また井手にも落入りたるを取上げんとて、御供の者ごもの、水にひたり入れるを、御心ぐるしうぞ思し召ける、或時、白河筋なる薄場といへる所にて、打とめ給へる雁の、水中にながれ行くを、向の岸にありける農夫が、取上げ奉らんとて、河中に渡り入るを、御覽じて、あれと、めよとのたまふにより、聲々によばひけれども、きこえずや有けん、股の上まで水にひたりて、其雁をとりえてけり、いかにこゝえもしつらん、何ぞとらせよかしこのたまふにより、御取次役奉りぬといらへ奉れども、猶御心おちる給はぬ御氣色にて、たゆたはせ給ふにより、竹筒に錢を入れて、河越しに投げ與へけるを見給ひて、其所た、せられけり、

一、御獵のをり、畑中にいらせ給ひては、何ぞ種子蒔きてもやある、能く見よとのたまひて、ぞ過させ給ひける、植物よき給はんとては、むさき所をも、いとせ給はざりけり、

一、つかふまつれるものごもの、職事につき、おもはざる過ち出來ぬるを、あながちに咎め

らる、事おはしまさず、大かたは御ゆるし蒙りぬれば、かへりて後をつ、しむの心ふか、りけり、御飼禽などの尤も愛し給ふを、あやまちて籠をもぬけしめ、其外御慰の具取あつかふとて、損ひなし、を、かしこまり申上げぬれば、予が慰の物なるを、あやまちしたりとて、侍共がいたくかしこまりなんは、中々に心いたきわざなりとぞのたまひける、夏の日いみじくあつきをり、御櫛つかふまつれる者の汗出て拭ひあへず、一滴御衣の上におとしかけぬ、あなかしこしとて、上司もてかしこまり申上げしに、暑きをり汗出でぬるは、あたりまへの事なり、殊にくしけづるは、骨折る事なれば、汗出でなん、その汗いだすまじきと心せば、髮結はん事かたかるべし、汗の出るを心になかけそこのたまひけり、

一、常の御膳の時、奉りぬる御手拭の上に、小さにひねりたる紙をさし置せられしを、跡にて見たれば、いと細き砂子にてぞ有ける、こは定めて飯の中にかまじりたらむを、人しれず、かくはなし給ひつらんか、る事も重賢君の御心もちひさせられしとひとしき御事なり、いつの年にか有けん、江戸往來の道中御小休の所にて、御櫛を奉りしに、それが縁に縫針の遺りありて、いさ、か御足を刺しけり、かしこき事なれば、それ奉れるもの、かたに申しきけんやなど申すを、聞召して、ゆめく、沙汰ばしすなどのたまひしが、猶も御心おちる給はぬにや、又近侍ごもに、先の敷物の事かたくなもらしそと、かへ

すく制し給ひけり。

一、いつにか有けん小島と云る浦を逍遙せられし事のありけるに、御やすらひ所にて、御供の輩に、御酒賜ふとて、近侍清原次兵衛行酒の役に立けるが、一人くにつぎ渡しぬるに、大槻彈藏一口飲みて、こは酒にあらず、醤油なりとて、並居る人に、いかに酒と思へるかご問へば、いな酒にはあらずと云ふ、君きこしめして、それは次兵衛が今持來る間に、ざれ事しつるならん、其過怠に次兵衛も一口は飲みてよとのたまへば、次兵衛も其醤油を一杯のみてけり、そこに並居し上下、皆ゑつばに入て、中々一座の興とは成りぬもごより、次兵衛は行酒にたてるのみなるを、そのあやまてる本を糺されなば、ふかくかしこまりぬる者も出來んとて、若き次兵衛が戯にとりなさせ給ひしならむとおもひ奉れば、あまりのかたじけなさに、一口の醤油のからかりしもおぼえずのみしなりと、後々まで、次兵衛ひそかに子どもらにかたりきかせしとぞ。

一、近習に初てめされし若侍、配膳つかふまつりしに、事なれざる程なれば、あやまちて、御もの打こぼし、御膝をさへ汚し奉りしかば、いたくかしこまり入りてぞ有ける、上司もいごかしこしとて、恐れ入りてこそ候へど申上げしに、不調法こそ尤なれ、昨日まで馬はせ太刀鉾打ふりぬる事のみせしものが、いかでよくし得てんぐるしからずとく出てつかへよとぞのたまひける。

一、或冬のことなりしが、殊に寒かりける日、御獵ありし、されば御歸の程を計ひて、御浴湯の設せしに、はや御歸館ぞといふに、御垢つかふまつる近習目附、御湯殿にありて、入らせ給ふを待ち奉るに、何か御用おはしまして、直に奥へ入らせらる、さらば今暫はさておはしまさんとて、御湯の加減をも心せずばあらじと思ふうちに、御湯殿に入らせられて、御浴なし給ひぬ、いかでかくは速にあらせられしぞと、いぶかしう思ひ奉りしに、あとにて承れば、奥にては女房達の心にて、ここに寒き日なれば、御酒あた、め御肴調じて待ち奉りをり、先づこゝに、とゞめ奉りしかど、御湯殿には、例の近習目附が浴衣のみして待ち居らんものを、いかで心なく物くひ酒のみてあるべきやと、急がせ給ひし故なりと、其時垢に參りし内田新右衛門肝に銘じて忝なかりしと、なん申しける。

一、御強記のほど、殊にいみじかりけり、近侍渡邊十右衛門初めて御側につかふまつれるに、仰られしは、先づ年時習館の生徒らが、説經きかせられし時、汝が講せしは、尙書周官にてありしよな、よく講じぬと宣ひぬ、おほくの生徒にてありしかば、大かたはひとしなみなるを、其時を過ては、誰は是れは誰と記得せん事、いともかたかめるを、末生學問の若輩が講釋を能くわすれおはしまさぬぞ有難かりける、又同人に仰られしは、汝劍術は武藏流にて、山東彦右衛門が弟子よな、先年汝は流義の五法をつかひしなりとのたまひき、武術御覽などの時には、御家中の若輩二百人もあらむを、覚えおかせ給ひ

ぬるこそいみじかりけれ、されば御内の侍外様につかふまつれるものは、年始五節句のをりならでは、御前に出づる事稀なるを、それさへ能く見まらせ給ひしごなん、

一、學校を設けさせられし以來は、御代々の初には、必ず諸士の文武の藝を御覽せらる、事なり、君御襲封の初時は十二月の半頃、最寒かりし日、數々の武術御覽有べきとの命ありしかば、師範くは餘多の弟子を率ゐて、曉より館に参りつごひ、日出る頃より始めさせ給ひ、終りにまかぬる者は、夜成の刻頃にもなりぬ、さて其夜、奥殿にいらせ給ひしかば、老たる女房どもの、けふはこの寒きに朝まだきより、表にのみおはして、いかに倦んじ給ひつらんと聞えあげしに、いなさにあらず、若者どもが、かねての業を、勵ひ勵める有様いとめざまし、其中には、今日初て覽し武術もありき、中々寒をも覺えず、いで今夜は心よく寝むとぞ仰せられける、

一、天保の八九年頃、や、御家中の上下を賑恤せしめ給ふ事ありけり、其旨布告せらるべき文の稿本を、有司より奉りしに、文中華飾過たることありしを御覽じて、國民を濟ふは、國守の任なり、それに何ぞや、恩きせがましき事を、故らにいふに及ばんや、かやうに恩きせがましき事を聞せては、中々に受るものも快からじとのたまひて、其文は削り改めしめ給ひぬ、

一、同じ頃にや有けん、或侯の家内の亂出來ぬ、その本は、侯の最愛せられし妾が、奸惡より

おこれる事にて、嫡を廢して、己がうめる庶子を世嗣にせんとのたくみなりしを、老臣ごも、いたく心を惱しぬれど、侯は愛に溺れて、老臣らが諫にもまたがはれず、事已に迫りて、殆どあやふく、世にあらはれなば、忽ち一家の傾覆に及びなんするを、君いかにして聞及ばせ給ひけん、遠き慮りをめぐらせられ、人知れず計らはせ給ふ旨おはしければ、其侯の家全きを得て、穩しく治りぬとぞ、されば、その家臣らは、竊に君の德澤を戴き奉りて、神の如く仰ぎ奉りしとぞ、

一、いつの年にか、中國路を歴させ給ひしに、備中國矢掛の宿にて、鍼醫金子民壽御鍼つかふまつりしに、いかに民壽、此所の名産と聞ゆる柚べしかひたりやと宣ふ、民壽承り、いかにも求め候ひぬと答へ奉る、そはいかばかりかとのたまへば、只一本をこそとときこえ奉るを、わらはせ給ひて、さてもまはきやつかな、今少し増して買はまし物をと宣ふ、民壽かしこまり、さあらば、恐ながら上には、いかほどめし給ひしやらむと申上れば、我は五十本ぞとのたまふ、さては民壽が身にて、一本は猶過分にや候ひなん、上のまろしめす御高になぞらへ侍らば、上には五六千もめし給ふべきを上こそ中々まはくはおはしましければ、きこえ上げれば、あはれいはれけり、上が上より下が下まで、分限といふもの、あなるは、民壽がこぞわれるが如し、此心得だに違はずは、世は程々に渡りなん、あなかしこ分限をなわすれそとのたまひて、却て御感にぞあづかりける、

一、近侍の若輩らには、事にふれ心得べき事ども、御さとしあり、例へば、諸器物調度取りあつかふにも、必ず人のしりへになおきそ、それ知らずして打こぼしそ、こなひなどしたらむには、其者の過失にはあらず、置所に心せざりし者の罪ぞかしこのたまひけり、或時、御前に柿を奉りしを、皆ども、それたうべよとの仰せにより、手々に小刀もてるに、一人柿を掌にすゑて、中をゑりぬがんとしけるを見給ひて、そは危し、怪我もぞしてん、さる事をして疵づきなんを、怪我さはいはれまじきぞ、我手して疵づけるなり、必ず心を用ひよとぞ仰せられける、

一、御庭内にまれ又御漁獵の折にてもあれ、御履の者居合せざる時には、御小姓役より履つかふまつるに、必ず御手をあげさせられて、いたゝかせ給ふ御氣色おはしましぬ、こは侍たらんものには、き物ごらせ給ふが、御心外のゆるなるべし、

一、儉約を守らせ給ふ事前にもあげし如くにて、すべて御先代の御おきてを守らせ給へれば、器物調度のお物好おはしまさず、煙草の具の如きも、煙管は鐵にして、金銀かざれるは用ひ給はず、御茶も上喜撰といふが上をば越させ給はず、又時々の初物とて、さげ申しても、齊茲老君、蓮性院大夫の御前に未だめされざる間は、きこし入れ給はざりけり、御衣も御肌着には、木綿のみめし給ひぬ、又土木の御物好ましまさず、常のお座所も、先君の御時のまゝにして、そこねたるのみつくるはせ給へり、御末年に御隠居所

の思召にて、濱町の第をいとなませ給へりしに、御居間の障子の唐紙に、いさゝか金色すりたるを御覽じて、かたはよろしけれど、同じくは、金のまじらざるもてせよと命じ給ひぬ、かゝる事にも儉約を守らせ給ふ御心ふかく、ぞおはしける、常の御褥の表の方やれそ、こなはれたるを、その儘にさしおかせらるゝ、より、裏をかへし奉りけるに、其うらさへやれつゝ、れにければ、今はとて製りかへてぞ奉りける、幾年ばかり用ひ給ひけん、御几上覆のきぬも、所々やれたるをば、糊してはりつゝ、ろはせ給ひてぞ用ひ給ひける、夏のあつき頃めし給ふかたびらの御衣に、色あせやすかるは、夕さり涼しくなりて奉れ、ひるのほご汗かき給はん、に、一度あらひすゝ、がせば、不用ともなしはてんが、あたらしきぞとのたまひけり、

一、東海道府中の宿過させ給ふ時には、所の名産とて、諸器物を多く御前に持出しぬ、されど御物好にてとらせ給ふ物とては、なく、音信のまゐるしなどに、買ひとらせ給ふ品は、稀にありけり、或時、最めでたくたくみに作りし重箱を持出しを御覽じて、いと奇麗なる物かなどほめ給ひて、さてかたへの者どもにのたまふには、かゝる物は世の不用とやいはん、常に用ひんには、よろしきに過ぎたり、用ひずして庫内にひめ置かば、いたづらなり、きはめて用なきものならずやとのたまひけり、

一、江戸と熊本との脚力ゆきかひせるは、月毎に兩度なり、まかるを、事もなきをりには、月

末のを延して、次の月初にあはせぬる事もあなるを聞召して、そはふびんなり、數百里を隔て、父母妻子に遠ざかり居ては、かたみにふみのたよりのみをぞ心やりとはせん、それに脚力一度省きなば、若干の日を隔てなん、こゝにもかしこにも、いかにおぼつかなからむに、一度の費をいとはずして、必ず二度の數をなかきそと仰られける、又江戸につかふる者の、夏のいごあつきをりには、御門出の定の數の外に日を増さしめ給ひ、上下の苦をなぐさましめ給ひぬ、

一、御參勤として、花畑の御館を發せ給ふの日、常の御居間にて、御酒めされ、御前に侍らふものにも、御盃賜はりぬるに、そゝろに御涙ぐませ給ふを、いかなる御故にかご見奉りしに、や、有て宣ひけるは、不覺の涙こぼしつ、上下おほくの者を、數百里の外にぐしゆかんには、みなく、父母兄弟夫妻の別をしむらん心の中、おしはかりければなりと、御聲くもらせ給ひにけり、

一、常には寛裕第一におはしませば、かりそめにも、憤怒の色をあらはし給はざりき、まかるに、天保の末頃、上野の火の御番にあたらせ給へりしに、時は十一月の末、寒氣殊に酷しく、雪みぞれふり、氷つら、ゐたるをりしも、山内失火有りて、大佛堂もやけぬ、されば君には御出馬あらせられんと、の事なりしを、途ぬめり氷りて、馬の足も立かね侍らんとて、おとな達はじめ、まひて出させ給はずとも、こゝめ奉りしかば、さらば物見せよ

とて、近侍を遣はさる、その者歸りて、途の有かた申上しに、さらば道のほど馬しづかにだに歩ませんには、危事もあらじとて、既に打出給はんとし給ふ、其間におとなの中より、月番の老中の許に、君いたはりおはしませば、老臣して御名代にさし出さるゝの屈をなん仕りしと申上しに、君いたくいきごほらせ給ひて、よしなき事しつるものごもかな、火の御番をば何の爲に仕奉るぞや、かばかりの事に公務怠らんは、いとかしこしとて、つやく、御寢食も安くし給はぬ御有様なれば、皆々恐入たるばかりなり、翌日は十二月朔日にて、必ず御登城あるべきなれど、前夜御病ありとこゝわらせ給へば、御登城もなし給はず、またあくる日は、松向寺三齋君の御征當齋日にて、かならず寺詣飲させ給はぬを、これにも御代參を命じ給ひぬ、これ偏に上野に御出馬なきによりてなるべし、公務を重じ給ひし事、かくの如し、

一、御代々の御征當齋日には、寒暑風雨の御厭ひなく、御慕詣怠らせ給ふ事おはしませず、其逮夜には必ず表居間におはしまして、如在の御愼ふかくぞおはしませしける、

一、櫛方は寶暦の度起されしに、中葉より又水前寺に蟻まめ所興り、御側御用と唱ふ、下吏の習ひ、各功を争ひ、櫛實をあつむるにつきて、國中二つにわかれ是が爲に價騰貴せるにもいたれり、君其弊をきこしめして、水前寺の方を本櫛方に屬せしめ給ひしかば、數年の弊害頓に止み、數量を定て、年々御側に納めしめらる、實に兩全の法と成りぬ、御

在世中、那史等精力を盡して、聖田開きしも數多なりき、これら上に賢徳の君ましましければなり、

一、前にもいへる如く、特愛殊遇好悪の御氣色いさ、かもおはしまさるにつけて、最めでたき御詠あり、

秋の野の千草は色をあらそへど月はわきてもやざらざりけり

と、實に御本性おのづからあらはれ侍るにこそ、晩年には御詠歌いよくす、ませ給ひて、高調あまたありけらし、既に江戸人某の撰みたる大江戸集といへるにも、御歌數首を載せたり、其歌ごもは、

關立春

あふ坂の關のすぎむら打ちかすみひと夜にこえて春はきにけり

庭花

雪とだに打ちまもらる、庭ざくら花のさかりはあからめもせず

田蛙

せきいれし水のうたかたあはれにもくる、門田に鳴かはづかな

月

雲はらふ風なかりせばいかでかくさやけき月のかげを見てまし

秋雨

とにかくに袖やすからぬおとすなり桐の葉さそふ秋のむらさめ

冬月

木がらしにさはる一葉のくまもなしかげさえまさる冬の夜の月

又御逝去ありし年の前年の暮に、

行年をいかにをしとていかにせんとてもかくても留らざりけり

と遊され、その明る春より心地例ならずおはしまして、四月にかくれ給ひしは、御先識ごも申すべき歎、いともかなしくかしこかりし御事なり、

一、故久我殿從一位内大臣通明の北の方は、治年君大御院の姫君就姫にて、君のためには大みをばに

あたらせ給ふ、此御方の歌を能くし給ひしは、世にいちじるし、御集あり、櫻木集と名づけらる、其序文は、君にあつらへ給へり、今梓にのぼし給へれば、こゝに贅せず、此御方はやく孤とらせ給ひ、華洛ながらも、雲のはるけきに嫁し給ひ、御子さへ世を早うし給ひしなど、よろづに御心ほそかめるを、君ふかくおぼしやらせ給ひて、江戸への御ゆきかひに、ごふらひまゐらせ給ふはさらなり、かにかくに御心用ひ給ふ事、ねもごろなる御事なりき、

一、詩作もあらせられけり、辛島才藏が江戸を發ちてかへれる時に、賜ひたる詩あり、

送鹽井叟歸郷三首

百花含咲艶陽時東武今朝惜別離五十三亭歸去後鎮西風月與翁期
 獨送歸人酌別卮和風如煽柳如絲雖知他日相逢近無奈暫時戀戀情
 三千里路欲珍重只願老年四體全再會應論治安策欲矯我癖倚良賢
 右の詩は才藏が江月へ参りつかへし時の御作なれば御年わかとおはしまし、ころ
 なり給句中老儒を重せられ答を乞はせ給ふ御心淺からざるを伺ひ奉るべきなりか
 る御事なほあまたあるべし又いつの御作なりしにか近侍のものに賜ひたる中に

春日郊行

東郊十里野禽啼步步風光花滿溪日暖千村農事起一年豐歉在春犁
 これら一時の御口吟に農事のうへにも及ばせたまへるぞ有がたかりける

にはの小柴 (文政十年三月齊護卿御出府御供日記)

長瀬眞幸記

ことしやよひのはじめの四かの日わが君の江戸におもむかせたまふみともにて朝と
 く家を出立つとて、
 あらき山かしこさうみもやすかれと君が門出にぬさをこそとれ家よりをの子ども
 おくり来て所々にてわかれば、
 ちかく別れ遠くおくりて歸るさの袖をひとつにしぼる我かなこよひの御とまり大
 津にさきだち行く里のこなたの並木の櫻咲そめたり、
 ときはさきおそきは枝にこもれども木末ひとつにかすむ白雲ごもし火とりてつか
 せ給ふこよひは草のまくらのはじめとてわきてわびし、
 五日つとめて出たちて二重山をこゆ空くもれり、
 雨雲に家はへだてぬ立のぼる山のたむけにかへり見れどもひるの御まうけする
 石の御茶屋に立よる御庭にながる、泉のほとりに梅さかりに咲たり、
 水きよきかた山蔭のかりのいほひと木の梅も香にはひけり申時過て内牧につか
 せ給ふ里の駒ごも引せて見たまふこよひ江戸より儀同の公のみもつげ來りて御い

にこもらせ給ふぞかしこき。

六日、よへのまゝ、くもりつゝ、風いみじう身にしむ、曉の霜道草におきて、阿蘇のね、雪所々にみゆ、坂梨のひるの御やすらひに、火をたきてあたる、かくて瀧室坂をのぼる、いはほの上なる霜いまだ消す、

風さゆる山のさか路をこえ行ば音のみすなる谷の鶯波野にいたりぬれば、さむさややうすらぎぬ、道のはとりはるくさの花、いとうつくしう咲たり、

なつかしき春の花野に行くれば草の枕もいとひだにせじ、きのふの頃、久住につかせ給ふ、

七日、なほくもれり、いつも中川の君の、今市の御茶やにやすらひ給ふを、けふはこなたなるつゝ、みの村をさが家に、ひるの御まうけすには、か事なりければ、知らで、行過ぬ、黒ごかうの櫻なかば咲たり、

白雪に色をまがへて咲くころは名のみ黒ごの山ざくら花、きのふにおなじき頃、野津原につかせ給ふ、

八日、空や、はれてあつうなりぬ、ひるすぎて、鶴崎にいたりつかせ給ふ、

九日、里の駒ども御庭に引せて、御らむせさす、中門のうちなる櫻さかりに咲たり、
みなと風ふかねごいそぐさくら木につなぎなごめそ里のわか駒

十日、けふも駒見たまふ、

十一日、御いみの日数はて、ひるばかりより、御船にのらせ給ふ、風まほあしく、みさの川じりにつなぎたるまゝにてあり、

十二日、きのふにおなじ、

わたづみの北ふく風をふきかへてみふねをおくれまなとへの神

十三日、風なほこなる事なし、

十四日、くもりて、風はふきかへねど、浪静なりとて、明がたより、みふねよそひて、守江にこぎわたりて、つなぎぬれば、程なく雨ふり出で、風いみじう吹きく、

十五日、みふねいませれど、風むかひよりのみ、吹きければ、守江にこぎかへす、くもりたれど降らず、夕つけて、はしふねより、磯邊におり給ひ、うへなる山にのぼらせ給ひ、わらびすみれなどつみて、かへらせ給ふ、

うま人の御手につまれて磯山にいろなつかしきすみれぐさかな、折せ給へるかには、櫻の花いごめでたし、この磯山所々に白う見ゆるは、みな此花なりとぞ、

十六日、御ふねいませれど、沖のさまあしければ、又守江にかへす、けふも、きのふの山にのぼらせ給ふ、

十七日、よべ子の時ばかり、貝吹き太鼓かね打ならして、櫓聲をあげて、みふねこぎいだす、

沖に出ぬれば、

おひかせのふきいでぬとてふな子ども真帆のつな引きたちさわぐなり、ほごなく明けぬ、

いごあれし風波なきてこぎ出るまほぢも遠くかすむしま山つくしのかたもいつのまにか、あごになりて、いはう島ちかく過ゆく、

我君のふな路やすくといはひ島いはひてけふやこぎわたりなむ、いはひじまは、今いはう島、又いはみ島などいふ島のこごなるよし、ある人のいへるによれり、いはういはみなどもいふは、いはひの音のたよりに訛れるにや、上關までと、こ、ろざしつれど、ひるになりて、風ゆるく、空はたくもりて、雨ふりいでぬべきさまなれば、室つみにこぎよせて、いかりおろしぬれば、雨おつ、

おきつなみよするうらすの松かげにみ船つなぎぬ雨やざりして、入江廣く船ごもおほくやざりゐたり、濱べの家ども立つ、きて、にぎは、しきみとなり、ふげむぼさつの寺、いらかいちじるく見ゆ、

十八日、晴る、御船いだせれど、風あしく、上關までこぎて、つなぎぬ、

十九日、風きのふにこごならず、か室につなぐ、日暮て神なり、雨いみじうふる、

廿日、あかつきがた、ふすまのひや、かなるに、目さめて見れば、きぬどもぬれとほりて、わ

びしさいはむかたなし、

うきねするならひに何かかこたまし苦もるよひの雨のしづくを明けて猶やます、かろうごへこぎ行てごまる、か子どもはじめて船うたうたふ、今までは江戸の御日敷には、いかりてありしなり、そのうたに、いはひめでたのわか松枝もさかえ葉もしげる、とうたふ言もふしも、ふるくめでたくて、いつもき、あかぬこ、ちするに、末には今やうなるもきこゆるは、のちにくはへたるなるべし、

廿一日、朝とくかろうごをいだして、びるばかり、みたらひにつなぐ、空はれて、濱べの見わたしよし、夕つけて、湊の上なる山にのぼらせ給ふ、ふもとの家に櫻の枝たわむまで咲たるは、八重なんめり、

船よするいそ山かげの遅櫻春もいく重の花のしたいほ、船おほくとまりゐたり、あそびおほかり、

夢さめてきけば、あはれもさよふかき枕にうたふうかれめの聲

廿二日、風なきて、うみのおもてたひらかなり、口ひこ日、こぎくらしして、輛のうらにつなぎぬ、沖のなごりに風くは、りて、夜もすがら、み船ゆるる、

廿三日、み船いださず、ひるの程、はまべにおりさせ給ひ、いそ山にのぼらせ給ふ、御船にかへらせ給へば、夕になりぬ、はや船いだせとおほせくだす、をりしも、沙かなひぬれば、やが

てこぎ出すにはか事なりければ船ごもきほひてこぎいづ此浦に名を得たるむろの木
岸におほくおひたりひやくしと云ふ木に似てはひたり世にはひむろといふ、

いにしへのひとの見してふどもの浦の磯のむろの木今も有けりさきく船つなぎ
し折は心つかでけふはじめでさだかに見ればぞかし又こにせんすいとてめづら
しき島ありそのほごりをこぐに岩などのさまから繪にかけらむやうにて所々におひ
たる松の枝たれたるふりのおもしろさたぐひなしこの島にもむろの木おほくはひて
ありここの浦には見ぬ木なり古歌によめるもめづらしき故なる也かくて沖にいぬれ
ば空のくもりあつぐなりて雨おつ日も暮がたになりぬれば白石にいかりおろしつ、
廿四日雨ふる夜明けて御ふねいだす風きのふの如しひるばかり下津井にこぎよせて
汐まちす空まばしはれて日かげさし出づれど又かきくらしふる夕になりて又こぐこ
よひは日比にこまりぬ近くさふらふ人々に浦の春雨といふことをよませ給へるついで
によめる、

けふも又はれぬごばかり浦船にうらみてくらす春雨のそら
廿五日つとめて御ふねいだす雲は晴れねど降らすひるばかりより追風ふきいづ守江
を出しよりはじめて帆をあぐ波の音しづかに御船たゆみなく行くひさぐうれしさ
にこ、ろいさむ申の時ばかり室の津につく、

いつしかごおもひわたりし八しほ路を渡りはてぬるけふの追かせまなごへの神の
みこ、ろなりけむかしまだ暮れぬほどにいつものみやざり名村が家にうつろはせ給
ふ人もわれも宿に行く日數へし船の中のむつかしさはじめてわすられてこ、ろよく
ねつ、

廿六日おなじ所にこ、まらせ給ふ日ひと日雨ふる、
廿七日なほはれず明けはて、室を出立給ふさきだちて室山をこゆ道のいはかごふみ
ならしつ、行くに雨しきりにふる坂を下りはて、又山のそばにつきて行くつ、じの
花おほく咲たり、

暮て行く春をのこしてみやま路に咲にはひたるいはつ、じかな越えはて、正條に
いたる川水まさりたり舟をわたるにながれはやからざればあやふきことなし、いかる
かのひるのみやすらひに行く道いさわろし雨はや、やみぬこのあたりよりひめぢま
で花咲つゝきたり、

我やごは今は青葉にしげらむをなほこのさとは花ざかりなり
さごごに春をふかめて桃さくら咲まじへたるつ、じ山ぶき
若かへでの紅深さが秋の錦にもてりまさりたる其木の大なるも所々に見ゆ、いとうる
はし、かくて姫路につかせ給ふは申時ばかりなりいつものみやざりにとまらせ給ふ、

廿八日夜をこめて、やどりをいづ、まばし行きて明けぬ、青山水ふかく、歩より渡りがたし、はだかなるをの子ども多く来て、寝といふものにのせて、かきわたす、あやしきこしのさましたる物にて、尻うこたれて、はたあやふし、市の川、かこ川は舟あれば心やすし、けふはかこの里にいこひたまふ、この寺に年ふりて、いと大なる松のあるを、今は三十とせあまりさきつかた、ひとく、と、もに都にのぼりしをり、立よりて見たりし其老木は、ちかき年かれて、わか木をうゑかへたり、

つぎうゑてまたいくはるもかすまぬを木だかくなりぬかこの島松、このあたりは、松のよくさかふる處にて、けふのみやどりのには、にも、枝ぶりおもしろくさしのびて、や、大なる松あり、ぐれて、大くら谷にこまらせ給ふ、

廿九日、暁より出たつ、舞子のこなたにて明けぬ、淡路島はひわたるばかりに見ゆ、沖のかた朝がすみのきえ行くひまに、白き帆ごものならびたる、いはむかたなし、このあたり、あごにも、さきにも、すべて松原つゞきなるを、此舞子の一里ばかりのほどは、松のさま、こと、ころにかはりて、根はまさごよりうへに、高くあらはれて、み木ふさく、枝は地をはらふばかりに垂れて、葉色のみどり、朝日にうつろひて、たぐひなし、木末は切そろへたらんやうにて、すべてくちたる小枝も、かれたる末葉もみえず、立さかえたるは、あやしう、めづらしき濱の松になむ有ける、木蔭はいつもはき、よめたらんやうにて、ちりだになし、神

の代に少彦名の神やつくりましけむと、いと過がてにのみおぼゆ、いくたび来てみてもあかぬ濱のさまなるを、舞子といふ名の後世めきたるぞ、いとくちをしき、須磨にいたりて、

吹こえし關路の秋のいにしへを去のふもはかなすまのうらかせ、このあたりに、松風村雨のふりしあご、てあり、又そなれみそといふものをうる家あり、をかしさにえたへで、たはれごとに、

なれそめしせきのまつかせむらさめにみそをつけたる中納言かな、ささびごのいはりごとは、これのみならず、又この里の家々、軒に竹のすだれをかく、平家のふるごををつけいふ、

すま人のむかしわすれぬ竹すだれかけてゆかしき賤がやのうち、かくて、兵庫にいたりて、ひるのみやすらひの家に入りて、庭をみれば、牡丹の花さきたり、

咲花の色はいとしもふかみ草春をふかめてにはふこの宿いで行て、里中を出はなるれば、湊川なり、楠の君のむかしをおもひて、

みなと川水あせぬとも大丈夫のきよきその名はちよに流れむ、水戸の西山のきみとまきこえたまふ、かしこきおはしまして、たて給ひし、忠臣楠子の墓道のほとりに近し、行くく、をがみて思へば、かゝる所は、苦むし芝おひなごしいたるぞ、あはれもいと、深かる

を石ぶみには、瓦ふける堂めきたるものを作りおほひて、其前なるかたに、茶やをかまへて、物うるやうなるはまうづるたび人のおほかる故なるべけれど、いとさびて、につかはしからず、むかし、ゆきかひのついでにまうでしをりは、かゝることいまだなかりき、近き頃、まればこのしわざなるべし、生田のみやしろの前なる道を過て、

かげくらくしげりも行くか神まつるいくたの森の木々のわか葉は、鳥井のうちなる櫻のうつろひながら、枝にのこれるも、中々にめでたし、行くく、沖のかたをみて、

むこのうらや沖ゆく舟のほのく、と霞わたれり、紀路の遠山、けふは道すがら、見わたしのさまおもしろく、程さほきをも忘れぬ、まだ暮ぬ程に、西の宮のみやざりにつかせ結ぶ、道すがらの歌ども書きつけて、御らんせさす、

惠ある神垣ちかくやざりして心ひろ田の旅ねをぞする、西の宮は廣田社となむいふ、晦日、まの、めしらむ頃より、やざりをいづ、こたびは大坂へは物し給はず、山崎越と云ふにおもむかせ給へば、こやの方へさし行く、此里より北のかた、むこ山に近き野路なり、日かげさし出ぬれば、のどかになりぬ、菜花野ひこつに咲たり、

すゝな咲くこやの野はらをわけゆけばをちこちかけてひばり鳴くなり、こやの里、今もすゝびたる家おほし、海は遠くなりて、芦なごかるべき所のさまにはあらずなん、こゝより一里あまりゆけば、川あり、歩わたりなり、れいのはだかなるをのこども、おほくつど

ひ來りて、あらくしげなるものにかきのせて、わたすこと、いみじうさわがし、

朝戸出に歩よりわたる旅びとの袖にさむけき春の川風川の名をとへば、むかう川と答ふ、むこ川のよこなはれるなるべし、すべて言の末をひきて云ふは、このあたりの言なればぞかし、なほまばし行きて、又川あり、池田川と云ふ、こゝにも、さきの如く、川渡すこと、あらそひさわぐ、川はせばけれど、水は深し、こゝより右のかたなる岡にそひて、まばし行けば、瀬川なり、けふの御ひるのまうけ、此里の五百井の何がしの家にゆきて見るに、大なるよきいへなり、庭おもしろく作りて、さくら又若かへでのいろふかきあり、いへのうしろは、山立ちつらなりたり、北山と云ふ、さてこの家を出て、猶行きて郡山を過ぎ、又二里あまり行きて、芥川につく、川は里のこなたをながる、

あだにたつうきなは今も芥川ながれて世々にたえずぞ有ける、むかし、男女の得うましかりけるを、からうじて、ぬすみいで、その女をせおひて、京よりこゝまで、のがれ來られける物語の思ひ出られて、いごあはれふかし、こよひの御とまりは、此里なり、申時過ぎて、つかせ給ふ、おのがやざりは、里なみよりや、引入たる所にて、さきの村をさなりしが、家なりとて、廣くきよらなるすまゐにて、庭のさま、こゝろありて、木ぶかく、いと、静に、竹の園には、鶯すみて、聲なつかしうなきぬ、あるじの翁、いごねもごろに、ごりまかなひたれば、こゝろへだてず、やすいしつ、

四月朔日、明けはて、いでたつ、よへのやどり、なごりつきせず、あるじ門までおくりいづ、
 とかくいひなぐさめて、わかれ行く、里中をすぎて、野路にいで、
 春くれて夏は來ぬれどたびごろもなほかへがたき朝戸出のかせ、ほごなく、日さしい
 でぬ、

をちこちの木末はふかくかすみつ、朝日にほへる嶺のよこ雲、高槻の城は、ゆくての
 右に近くみゆ、永井のひたのかうのこの、まりたまへる城なり、こ、より南の野、いとひ
 ろし、一里ばかり行けば、古曾部の里なり、能因法師のつか、ちかきあたりにあるよし、ま
 べの石立り、

くれゆきし春のこそへのいにしへを問はでよそにも見つ、ゆくかな、ほうしは肥後
 の進士なり、わが國の宇土のこほりにも、古曾部村ありて、つかもあり、のちにうつせるに
 や、この朝は霞ふかく立て、

いこま山見えすなりにし古のいほりおぼゆる夏木立かな、かくて、かちはら神ないな
 どをへて、山崎にいたるに、小き流あり、水無瀬川はこのながれなるべし、離宮八幡宮の鳥
 井の前を過て、右にわかれて、田の面の道を一里あまり行て、よごひめの社の鳥居のも
 より、小舟にのりて、大橋の北のつめにつく、こ、よりおりて、川のつ、みを歩よりのぼる、
 水そこにうつろふ影もふかみどりよどめる川のきしのをやなぎ、うちなびくいろす

ずしく、行きつくして、伏見にいたりて待ち奉るに、ひる過てつかせ給ふ、

二日けふは、此里にと、まらせ給ふ、おのれはきのふより、こ、ちそこなひて、日ひと日、や
 ごりにふしつ、

三日、よべより雨ふる、曉に出立給ひて、京へのぼらせ給ふ、おのれはいまだこ、ちつねな
 らず、物にのりて、山科の方へいでたちて、たゞに大津に行く、ものみのすだれこめていふ
 せし、やごりにつきて、やがてふしつれば、みやごりにも、えゆかすなりぬ、こよひ子の時は
 かり、京よりいたりつかせ給ふ、

四日、雨はやみぬれど、雲なほはれず、伊勢路に物したまふべかりしに、朝さきさはり出き
 て、にはかに美濃路におもむかせ給ふ、こ、ちいまだおこたらねば、けふもすだれをだに
 まかず、出たちぬれば、潮ならぬうみなれど、何のみるめもわかず、草津につく、ひるの御や
 すらひ、田中の何がしが家に立寄て、まばしいこひて行く、か、みのすくにて、

立よりて見れば、くもれりか、み山旅ゆく袖のいかにやつると、こよひは、守山にやご
 らせ給ふ、

五日、猶くもれり、道のほごりに、山ざくらさかりに咲たり、八重なるも見ゆ、

さくらいろにそめし衣はかへぬれど、猶さかりなる花のあふみ路、すりはり山をこゆ
 ごと、

たび人のやつれし袖にははせてけふやこえなんすりはりのやまたむけよりかへりみれど、うみはくもりて見えわかず、醒が井のみやどりにいたる頃くれて雨ふりいづ、戌の時ばかりつかせ給ふ、此家の庭のいづみ、いささむし、日ごろのこ、ちやうくおこたりぬ、

六日、なほ晴れず、をりく雨ふる、道はたあし、物にのりてねぶりたれば、寝物語もゆめに過て、水音におどろきて見れば、關の藤川なり、古戦場をかへりみつ、行きく、垂井の御ひるやすみに立よる、こ、より南宮山をはるかにをがみて、猶行きて、墨俣の御とまりにつく、暮ていたらせ給ふ、おのがこよひのやどり、まことになまくさし、

七日、けさもはれず、明けて出たつ、里中をいづれば、やがて川なり、水いとふかし、舟ごもおほくつごひ居たれば、いそぎのりて、こぎわたる、さて野路遠く行きて、又川あり、名をとへば、ろく川のさわたりなりといふ、なほ行きく、てさを川にいたりて、又舟をわたる、くりたるやうなる小舟にて、ゆられて乗にくし、

風にちる木葉とばかりみなれ掉こぎ亂れてもわたる川舟、こ、より清須までの道ひちふかくて、人みなゆきなづむ、

旅びごのつかれはき原ぬかり道いなはきやすにあさる驚かな、なごたはふれて、いなはのひるの御やすらひ屋に、まばしいこひて行く、道のほとりの田に、れむぐゑさうの花

いとうつくしく咲つゝきたり、のれるもの、かけるをの子が加たるをきけば、このあたりにては、年ごとにこのくさを、冬よりたねまきおふして、田のやしなひとすこかたる、西の國などには、さる事なし、たゞいづこにも、田にはおほき草にて、おのづからおふるを打かへして、田つくれど、かくこささらにうゑおふする事は、こ所には見およばず、なん、此草のむかしの名は、いかゞ言ひけむ、古き歌などにも、よめるをきかず、今は何の國にても、おほく、迷華草と云ふを、わがひごの國にては、さはいはず、ほうそ花とぞいふなる、そはもがさのはじめあかみたるに似たるゆゑにや、日くれて、宮につかせ給ふ、

八日、空はれたり、明がたより、やどりをいでたつ、笠寺にて、日さしいづ、鳴海はまた朝のほごにすぎで、池鯉鮒にひるの御まうけするをみて、なほゆきく、て、岡崎につく、申時過て、いたらせ給ふ、

九日、くもれり、また明はてぬにいでたちて、赤坂の御ひるやすみに立よる、こよひは白すかにごまらせ給ふ、

十日、夜をこめてたつ、潮見坂をこゆるに、浪のおと、足もとにとゞろく、沖はくらくして、あやめもわかず、さかを下りはて、はし本にて明ぬ、あらわの舟をわたる、

はしばしらたてしはいくよ、遠江くちぬ、濃な名にのこりつ、
いにしへは橋よりゆきしはまなちを小舟こがる、今切のうみ

舟人のかたれるは、このうみは、たてにも、よこにも、五里程ありて、北のかたは、濱松の里の
 そともまで遠く入たる江なりといふ、そこぞいなさ細江なるべき、いつもく見あかぬ
 入江のさまになむありけるを、沖のかたのあらうみの波白う立あがりて、たとへば、さわ
 たつがねたらむやうに、よせかへるさまのすさまじく、磯もとゆる音のさうろくには、
 いとくおごろかる、かくて、濱松のひるの御やすらひに立よりて、猶ゆきく、て、天龍川
 をわたる、水まさりて一瀬にながる、舟の中にて雨ふりいづ、池田より田面をつたひて行
 く、ほそ道いとし、見付に申時過てつかせ給ふ、

十一日、空きよく晴る、朝よく立て、にひ坂のひるの御やすみに立よりて、さやの中山をこ
 ゆ、いとあつし、たむけの小屋に、あめうる女の聲、いつも物うく聞ゆ、きく川にまばしやす
 らひて、又山一つこえて、金谷坂を下りて、大井川をわたる、れいの川こしども、おほくいで
 て、わたすこて、立さわぐ、藤枝の御とまりに、いぬの時過て、つかせたまふ、

十二日、うつの山をこゆるに、のれるもの、うちにて、ねぶりければ、

日かすふる旅のねぶりにうつ、なき夢に越え行くうつの山みち、丸子の御やすらひ
 にてきけば、けふの沖津のみこまり、府中にかはりぬといふ、さてはとて、いそぎて、あべ川
 をわたる、水あさけれど、川こしどもにかきわたされて、府中にいたる、にはか事にて、やど
 りども、いみじうさわぐ、けふも暮てつかせ給ふ、

十三日、よべより雨ふりて、けさも猶はれず、沖津のみやすらひにいたるに、いみじう降り
 まさる、浦田川をわたるに、沖つ風つよう吹しきりて、雨よそひをひるがへす、川越のをの
 子ども、あらそひわたす、この川、今はおきつ河ぞいふ、わたりはて、さつた山をこゆ、
 いはねさくいはきの山も平けくふみこそならせみよのさかえに、むかしは、いはき山
 といへりけるを、今さつた山といふは、山上に地藏さつたをおけるによれるか、此道は近
 き世にひらかれしなり、古は此山下の磯をかよひしとぞ、今古道と云へり、くら澤にやす
 らひて、沖のかたを見わたして、

ふる雨に沖のまほ路もくらはさはのむかひにたざるふじのねの雪、このわたりより、ゆ
 ひのかたまで、田子の浦なりとぞ、まほがまおほし、

もしほくむたごのうら浪沖あれてあまのまてかたいとまあるらむ、申の時過て、蒲原
 のみやどりにつかせたまふ、富士川水まさりて、舟渡さすなどいふ、いと心もとなし、
 十四日、ふじ川、舟わたさすむなしうとまらせ給ふ、けさは、人もわれも日たくるまで、ねて
 あり、

ふじ川の水まされりときく旅の朝いに結ぶふるさとの夢、日ごろあかづけるきぬご
 も、取いで、ほす、

たび衣かたのまよひに日をよめば四十ちあまりてよかぞへにける、永き日のくれか

でなるをわびて、里の上なる城山に登る、いさげはし、山上に貝のこもれる石おほし、いとめづらしとて、人々ひろひさる、いと上代には、こゝまで、うみなりしにや、いたゞきの少し平らかなる所、本丸の跡なるべし、そこに八幡宮をいはへる小祠あり、此城は蒲原氏の人のすめりしとぞ、山中にどふと云ふ木をおほく植う、油をさる木なりとぞ、西の國などには、なき木なり、さて此城山の東北に立めぐれる嶺のあはひより、ふじのねはひわたるまで、ちかう見ゆ、まろかねもてつゝ、みたらむやうなる高ねの雪に、夕日かゝやきて、まばゆし、うみはあしもとに、うらくのさま、一目に見わたさる、磯ぎはに打よする浪の白う立かへるに、又一すぢにごりて見ゆるは、ふじ川の水のながれられるなり、こをみるにも、あす、その川の舟わたらん事、いよ、おぼつかなくおぼゆ、かくて、山を下りぬれど、猶くれず、こよひ、月いときよし、歌つかうまつれと、ちかきみあたりにつかへまつる人々におほするついで、おのれにもたてまつらしめ給ふ。

いははらの里にやどりてみほの浦やきよみが崎の月をみるかな
 故郷のおもひもまばしわすられつ月のきよみのうらちかくねて
 ふじ川の水まさらずば今よひしもきよきうらわの月を見ましや
 打よするなみにくだけて玉とちり花ごさきいづる月のかげかな
 ふじのねの雪にひかりをあらそひて浦なみとほくすめる月かげ

名にしおふ秋にまさりてすむうらの月にちぎりのひと聲もがな
 すみわたる月にこよひはあかしてあすやわたらんふじ川の水
 十五日けさより舟わたすとき、ていそぎて、やごりを出たつ、岩淵のこなたより、ふじのねの雪朝日にかゝやき、ことにまちかう見ゆ、川べにいたりて、舟いだすをまつ程久し、やありて、川をささも来りて、わたり守をよばふ聲しきりにて、むかひより、舟ごもこぎ来れば、やがて舟出をゆるす、人々あらそひのりて、早瀬に掉さしわたる、舟ながれていとあやふし、此川の舟は、よのつねのこととなりて、ふなばた高く、のるにも、おるにも、うませなどこゆるこゝ、ちす、わたりはて、本市場にやすらふこゝ、より、ふじのねいごちかう見ゆ、又すそ野のそかひに雪のつもれる嶺、ふもこの山あひより見ゆるをさへば、木曾の山なりといふ、かくて、吉原のひるの御やすみにて、人々のよませける、

天ぐものいほへがうへのふじのねにみじかきこゝ、ろいかでおよばむ
 あまた、びゆき、に見れどふじのねはけふも初めてみるこゝ、ちして
 まぢかくてむかひみつればおもはゆきまでにぞみかくふじのねの雪
 かくいふうちに、つかせたまへば、人々お前にもてゆく、こよひのみやごり、三島なりける
 を、さはりいできて、沼津にやどらせ給ふ、申時過たり、
 十六日空は、曉の月影かたぶく頃よりいでたつ、三島のこなたにて明ぬ、けふは歩より

箱根路の坂をのぼる、初音が原舟くぼなどいふあたり、鶯おほく鳴く、

いはねさく山の坂路をこえ行けばなづかしき音にうぐひすの鳴く、ふじのね晴れて、ちかうかへりみらる、みつや山中など云ふに、まばしやすらふ、ひるになりて、いとあつく、あせあゆ、箱根にいたりて、みやどり柏金がもとに、まばし立よる、このいへ、おくのかたより、海ちかう見ゆ、

ふじのねの雪にみがきてあしのうみの水のかゝみはちりもくもらす

富士のねのゆきをうつしてあしのうみの底にしつけるおきつ白たま

はこねのうみを、あしのうみといふとぞ、かくて、山を下りて、畑湯本などにやすらひて、小田原につきぬれば、日入頃になりぬ、戌の時ばかりにいたらせ給ふ、

十七日、くもれり、夜をこめて出たつ、酒匂川にて明ぬ、れいのをの子ども来りて、のれるものかきわたる、水はあさし、大磯のひるのみやすらひにいたるに、風いとさむし、さつまの中將の君、ごなりの家にやすらひ給ふ、かなたこなたの人々おほく行きあひつとひて、にぎは、し、なほ行きく、て、馬入川をわたる、舟のなかにて、

川上にもゆる高嶺のあふり山雨ふらむとぞ雲のか、れる、この川、さがみ川なりとぞ、近き世に、山も川も、もじごゑによびかへて、あふりだけを、今はうかうざんとぞいふなる、あふり嶽といふ名は、人しらすなれり、いとくちをし、けふは日高く藤澤につかせ給ふ、

山まつの木のまをもりてひゞくなり藤澤でらの入相のかね
よひのほどよりいねつ、

東路の五十のうまやのかり枕ひとよふたよに今はなりぬる

曉のまくらにつけてふるさとの夢おどろかすかねの聲かな

やがて、おき出てみれば、空くもれり、雨よそひしていで立つ、一里あまり行て明ぬ、程が谷のひるの御やすらひにいたりて、雨ふりいづ、此里のいへく、屋上にうゑしあやめ花さかりに咲たり、

棟にうゑるあやめのはなの色ふかく咲にはひたるほごがやのさと、花さかせんごにはあらで、棟のくちぬために植うごいへり、山里にはかゝるたぐひあり、未時過て、川崎につかせたまふ、江戸より御むかへの人々来りて、いとにぎは、し、

十九日、あめやまず、明けていで立せ給ひ、六郷川、舟さしわたりて、大森にまばしやすらひ給ひ、午の時ばかり、龍口の御館につかせ給ふ、

東路の道のながてをやすらけくみともつかへしけふのうれしさ、よろこびまをしな
どして、元矢の倉のやどりにゆけりしは我家につきたらむこゝちす、

春のかり(文政十一年四月齊護卿御歸國御供日記)

長瀬 眞幸記

ながしこのみわびあへりける、むさしの、草の枕もはやひと、せをあかしくらして霞に歸る鴈がねにうちつれんこと、いとしもうれしきに、ことしは我きみのいでたちたまはむほごにさきだち、又はおくれてもたちぬべき、あらかじめなりつるを、ことなるおほせごごありて、又しもみごものかすにくはへ給へるぞ、ことにうれしきや、いつしかと待わたりつる、處々の花も咲そめぬと見るまに、をりからのながあめにうつろひつ、青葉のみしげりゆきて、うのはなづく夜に、ほと、ぎすの音もしばくきこゆる、きのふいふいでたちのいそぎに、ことおほかり、あすた、むごするひるばかりより、龍口いさらご二みたちにまわり、又またしき人々のもごを、こ、かしこ、ごひなどしけるほごに、くれはて、やごりにかへりぬれば、や、ふけぬ、つごめて、矢の倉のやどりを立いづとて、

ひと、せのかりねのともなれぬれば、おきわかれゆくけさぞ物うき、時はうづきはつかあまり八日の辰の時過るころ、たつのくちのみたちをいでたち給ふ、おのれは御かたはらなる荷ごも、をの子らにかきもたせて、さきだちゆく、

わがきみのけふの門出をいはひつ、いそぐもうれしふるさとのたび、朝のほごくも

りて、小ざめふる品川にいたりて、江戸のかたをかへりみれば、さすがに日頃の名ごりど
て、老のまなこ、かすみがちになんかくて、さるの時すぎて、川崎のみやどりにつかせたま
ふ、みごもの人々、おのがやどり／＼にゆく、おなじき草の枕ながら、こよひは、わきてゆめ
もむすびかぬるこ、ちするを、さけななどにまぎらしつ、ねつ、

廿九日夜明て出立つ、雨なほはれず、ひるになりて、雲のこりなくきえて、そらきよし、ふじ
さはにやごらせ給ふ、おのがやどりも、こぞの春ごまりつるいへなりければ、そのをり、あ
りしことゝもいひいで、すぎにしあとしのふも、うきたびのこ、ろなぐさになむ、

五月朔日、あかつきにおきいで、見れば、空くもれり、雨も降いでぬべきさまなりけれど、
さらにもふらず、こよひのみやどりは、小田原なり、明日のそらいかならむといひつ、ね
ぬ、

二日、よなかより、雨いみじうふる、まだあけぬにいでたつ、道いさわろし、里中を出はなる
る頃、はや明はてぬ、三まいばしをわたるに、

さみだれの雨は、けさよりふりそめつは、やまさりゆく山川の水、湯本よりのぼる坂、い
はかどにひちふみなめらして、ほと／＼谷そこへころびおちぬべく、いとあやふし、をり
しも、鶯の鳴ければ、

いはねさくやま路こえゆく、苦しさもわすられて、きく鶯のこゑ、ほと、ぎすも、こ、か

しこに、こゑたえず、

雲きりをわけきて、きけば、あはれさのいとしも、ふかき山ほと、ぎす、たむけにいたり
ぬれば、雨やみぬ、三島のかたへ下る坂路いとわろくなづみつ、ゆきつくして、三島をす
ぎぬ、まづのみやどりに着ぬ、此里は水野のいては、のかうのこの、城の本にて、海近く魚
のあざらけきが、おほかり、宿あるじ、たいをおくれりければ、さかなにてうじて、酒あた、
めさせ、一日のくるしき、わすれんとて、あくまでのみくふ、

三日、きのふのま、くもれり、をり／＼雲ひらく、

さみだれのはれしあしたに見あぐれば、すゞしくきゆる富士のねの雪原、ごよし原ご
のあひだに見し、のちは、雲ふかくとちて、いとくちをし、藤川をわたるに、水まさりて、波た
かく、舟ははや瀬にのりて、川下へ遠くながれゆくを、やう／＼さしとゞめたるあやふさ、
いはむかたなし、いはぶちにのぼり立て、かへりみれば、ごほじろき川水の末は、いくまた
ごもなく、ながれわかれて、うみにそ、げるを、沖のかたより、青き波のうちよするに、あら
そひて、なるおとすさまじく、磯もどゆすりて、耳とゞろく、おきつまでも、し給ふべかり
しを、さるよしありて、かまはらにやどからせ給ふ、こぞも藤川の水まさりて、一日こ、に
ごゝまりたまひけるを、こごしまたおなじさまに、ごゝまらせ給ふことよご、たれも／＼
いふ、

四日、いさ、か風のみこ、ちあしうおはして、ごまらせたまふながきひをくらしかねて、さかめほのほごりにのみまごあしつ、

五日、きのふにおなじ、ひるより雨ふりいづ、けふはあやめふく日なりけり、

なつかしき香にこそほへうまやちの里にかりふくのきのあやめは

六日、よべより、いみじうふりまさる、明日は立せたまふべき、おほせなるよし、うけたまはる、いごうれしきにおきつがは、水ふかしといふ、はた心もごなし、

きよみがたいへ路をいそぐたび、ごをなにごむらん波のせきもり

七日、雨はふらねど、なほくもれり、かまはらをた、せ給ふ、田子の浦をすぐるに、いづの山々、雲につ、みて、ふじのねの雪見るよしなし、こそ來しをりにこそならず、おきつがはの水は聞しに似ず、此宿にて、安藝の少將の君に行あはせ給ふ、紫おふるむさしの、ゆかり、あさからず、おはしませば、なつかしき、みものがたりども、つきせず、立わかれたまひけむかし、あべ川、水まさり、わたりとまれる、府中にやどらせ給ふ、

八日、よべより又降り出づ、かくては、いつ川わたりなむごもしられず、いぶせくて、豈ばかりより、里のきたなる、せむげむのみやしろにまうづ、この神は、かしこくも、二あらの山にいはひ奉る、大ごむげむの、ふかくたのみ奉りたまひて、戦のには、大なる利を得たまひしによりて、みとしろあまたよせ奉りたまひ、みあらか作りあらためなどし給ひて、あつ

くうやまひたまひけるより、今もおほやけのみさだとして、みやづくりのめでたさ、たぐひすくなし、そのみやしろのうへの山なむ、まづはたやまなる、

みやあするやまの名におふまづはたはあさまの神やおりはじめけむ、木花開邪比賣をまつれりといへば也、のちに駿河の國の風土記のちりぼひのこれるといふ物を見るに、まづはたの社は栲たけ機はら千々ちぢぢ姫命ひめのみことを祭れるよし、まづはたの山の名よしありて、おほゆかし、山のいたゞきにのぼりて、四方をみめぐらせば、まづ東のかたなるちかき山の下に、ひろきぬまあり、西をかへりみれば、あべ川の水、川原をはらひて、あふれたり、その川なみにうきたるやうにて、木ぶかくちひさき島のみゆるは、こがらしのもりなむめり、かくては、今一日二日のほどに、川をわたりなむごとは、おぼつかなし、南は海ちかくみえ、うしろは甲斐まな、山々、いくへともなく、立ちつらなりたり、目もあやにて、まばし時をうつしぬ、かくて山をくだり、里中をうちめぐりて、やどりに歸りぬれば、ほどなく、くれぬ、

九日、けふも、日ひとひ雨やまず、

十日、雨雲のこりなくはる、水なほあせずといふ、むなくやどりにあり、

十一日、きのふにおなじ、夕つけて、今川氏のほだ、所林際寺にまうづ、淺間のみやしろうより北のかた五六町ばかり、おなじ山つゞきにて、さびしき所なり、かやふける方丈のほぞ

むの右のかたに、義元あその君の肖像をおけり、かうぶりうへのきぬのよそひ、おごそかなり、よろひすゞりなど、手なれのものもありとぞ、この十九日なむ、かのあそのきみの月忌なりとて、わかきほうしら、みまへのくさとりきよめなどなし、わたり、寺のうしろは、山にひきそひてほごなし、庭のつくりさま、おのづからなるいはほに苦むして、おもしろし、泉の流れたるほごりに、西湖梅とて、名を得たる一木あり、大権げむのこ木につがせ給へり、となむ、其實さねやはらかにして、かみてもろくなく、くさといへり、めづらしきうめなり、又客殿のおくのかたに、今川の君の御學問所と云て、大ごむげむも、こゝにふみよみ物まなびし給ひしとぞ、その家は近き頃、作りあらためつとみえて、きよらなり、よしもとの君のつかは、此てらのうちにはなし、こなたなる道のほごりに、かやふける小堂の内に、五りむの塔のかき石のみをすゑたり、こは首塚なるとぞ、桶はさまなるは、むくろをうづみし所なるべし、此堂の南にとなりて、おなじく、かやがのきふりたる寺あり、天澤寺といふは、此寺にや、よしもとのきみの法號を、まか名づけたればなり、

そのかみのあはれをそへて旅衣そでをぞしほる天ざはの水、今川氏の代々のつかは、あへかはの西なる地に、そうせむじといふてらの内にありといへり、又城の跡は、林際寺のおなじ山つゞきに、北のかたにありて、今も石のつひぢ、所々にのこれりとぞ、こゝより、や、ほごへだ、れりとさき、て、行きてもみすなりぬ、

十二日、あかつき、いさ、かふりて、明ぬる頃は晴れたり、あすなむ川わたることをゆるすといふ、いごくうれし、

十三日、府中をた、せたまふ、あへ川も、あさ瀬わたらせたまひて、藤枝にやごらせたまふ、いなばの中將のどのも、おなじ里にとまり給へり、本陣となりあひなり、

十四日、くもれり、朝ごくい、で立ちたまひて、大井川のこなたまで、いたりたまふ、東より西よりのぼり下りのもろ國の君たち七は、しらまで、来つとひたまひ、こなたかなたの川原せくいへくのゑるしののぼりはたたて、おくれじと競ひわたり給へば、重荷おふ馬のいはゆる聲に、かきわたるをの子らがよばふ、こゑ、川瀬の水音にひきあひて、た、かひのにはにまじはれらむも、かくやごおびたしくなりとよみたり、こたびの水は、山しほといふもので来りて、大木の根ながらこぢぬけたる、又家なども多くながれたるが、川中の洲にごままりてあり、水は川ひとつにあふれたるあごありて、いみじき水になむ有ける、日數七日ほごわたりごまりて、けさなむわたりそめつれば、水なほふかくして、たけのみじかきをの子のかたを、波のうちこゑ、あやまりて、荷をさりながし、あるは川そこの石につまづき、おぼれなどして、あやふきめみたるも、おほかめり、人々や、わたりはて、川瀬静になりてのち、やすらかにわたらせたまひ、掛川のみやごりにつかせたまへば、ほどなく暮れぬ、けふ大井河わたらし時のあやふさども、人々ごかたらふついでに、たはぶ

れて、

大井川くだるいかだごみつるかなかきつらねてもわたるおも荷をみやこのにし
の河ならばはなつみておもしろからましをけふのいかだはすさまじくのみおぼえぬ又
けふさやの中山こえて掛河に來し道の伊達方と云ふ村に石川爲藏が許をとひけるを
この頃白すがに行りてなきほどなりければ

あひ見しはみそち三とせのむかしぞとおもへばとほきあはうみの國といひ出づれ
どかきものこさで打過ぬゆくさきいそがれてなむ、

十五日くもれり天龍川の水一瀬に流る川のなからにすいできてたゞちにさしわたり
がたく舟どもあまた、びさし下し又ひきのぼりなどするほど久しわたりはて、かへ
りみればおくれし人々は今こぎかへる舟まつてかなたの川つらにつごひわたるか
ほごものちひさくみゆ川のひろさ五十町ありとなむいふこの川の名むかしはあめの
なか、はと云ひしよし物にみえたるを今はてむりう川といふこは初めあめのなか
はと云ふを天中川ともしに書きけむをそのもじとてなへなしててむちやうがは
といひ又よこなはりててむりうとなりつひに天龍と書きなしたらんも知るべからず
さるをあるひとのなかは龍の梵語なるゆるなりといへるはなほしひごとなるべしこ
よひははま、つにやどらせたまふ、

天中川
天龍川

十六日けふもくもれりをりく小ざめふる舞坂までの道すがらいくたびかはれくも
るらむ此道のほど遠さにはいつもく行わひぬる行きく今切のわたりを小舟に
のりて渡るうみの上たひらかなりおきのしほうみには青き波いとしろう立あがり磯
に打よする音おどろくしうなりひきていごかしこしされど内外のうみのへだて
にあまたのくひごも打みだしてあらうみの波をよけつれば今はわたるふねのうちも
心やすしほどなくあらむにつく磯におるころ雨一むらふる里なかの茶屋に立より
て物くひ酒のみなどするまにやみぬればやがていで立行くに此里の飯田群と云ふ
人おひ來りてのれる者をひきこめて物いふこそ白すがのやざりにふみおこせてお
のがよめる歌こひし人にてその折のよろこびまをさむために來れりとして所のむな
ぎをくしやきにしたるにからくだ物なごりそへておくれりごまりをいそぐとてそこ
くにあへしらひてわかるゝに、

あひ見れどかたらふひまもなみのよるはまなのはしのふりしむかしをとなむいひ
てすぎぬこよひのみやざりは白すがにておと、ひ伊達かたにてこひける石川爲藏を
おもひいでつれど夜になりぬるうへにあすは曉に立ぬべければそのやざりをだにこ
はずなりぬ、

十七日まだあけぬに出たつ雨いみじうふりてにはたづみさとなかにながるゝをなづ

みつ、わたり行きて、野路にいでぬれば明けぬ、ひるになりて晴る、いとあつし、岡崎にこ
まらせたまふ、やどりぐに、あそびごもおほかり、

かりまくらむすばまほしきなつの野にいと、ねよげのひめゆりの花、この里のは、世
に名を得たればぞかし、

十八日、そらきのふにおなじく、道のひちふかし、今日もひるよりはれて、あせあゆ、ちりふ
を過て、なるみちかくなる、なほゆきく、て、笠寺の門前の茶屋にやすらひぬ、此寺の祭な
りごと、人多くまうでつどひたり、あつたのかたより、わらべら、いくむれごもなく、うるは
しききぬども、同じさまにいでたちよそひて、ゆふつけたる駒のつな長く引きて、まうで
來、そが中にいとけなきどちは、わらをつがねて、駒形につくり、あるは折敷に馬とい
ふもじかきたるを、竹うまのやうにひけるもあり、さるたぐひは、そのは、又めのごなど
つきしたがひ、二つ三つなるみどり子は、せおひふごころにいだきなどして、うまごもの
まりへにつきて、道もさりあへぬまで打つれ來、いとくにぎは、し、

笠寺の神のこ、ろもいさむらしひきつらねたるわか駒のかず、あつたのみやざりに
つきてみれば、くれちかくなりて、さきのうまごも引きて、わらべらかへり來り、里中を
しらす、そをみむとて、いへごごに人おほくたちいづ、

十九日、そらきよく、にはもよし、朝なぎに尾はりのごの、みふねより、間遠の渡をこぎわ

たらせたまふ、追かせしづかにふきて、ひるばかり、桑名に着ぬ、か子ども、さをうたの聲を
かしう謠ひて、きしにさしよす、船よそひうるはしく、あかきものして、みつあふひわのう
ちにかける白きはたのぼり、みなご風に吹なびかせたる、いごめでたし、やがて、いつもの
みやざり、丹羽の何がしが家にむかへいれ奉れり、おのがとまれるいへも、おなじいへな
みにて、おくのかたには、ほり川の水す、しくながれて、小舟あまたつなぎたり、川をへだ
て、むかひにちかく城のいしつひぢながくつきたる屏のうち、にうるなべたる松の葉
色の、みざりふかく立しげりて、みるにあかず、

廿日、あけていでたつ、けふの道もほご、ほし、物にのりたれば、あさけのねぶり、日ながに
さめず、名におへる杖つき坂も、をの子らが肩にふりし代のゆめながら、こえゆきて、關に
つきぬ、こよひしも、いねがてに思ひつ、くれれば、まごや、すぎしごしのふゆ、

先君のみこ、ちつねならずおはしまして、こ、にひかずあまたとまらせたまひし、その
をりのことをまのび奉れば、いと、かしこくて、

す、か、は八十瀬の波をけふわけてこふるむかしに袖ぞぬれける

廿一日、朝ごく立て、す、か山をこゆ、くもりて、安濃のまつばらにもかへりみられず、つ、
らをりなる坂路をのぼるほど、をぐらく立しげりたる木かげのいぶせきに、

さやかなる音にもなかなす、かやまふりすてがたき谷のうぐひす、ちりにし花に、

なきつるなごりをしもなつふかき山かげに、まばくきくもめづらしかし、かくて石部にみやどりはさだめたまふ、みやこのや、ちかくなるのみ、うれしくて、ひるのいたづきをもわすれてねつるに、神遠くなる音して、夕たつ雨、いさ、かふりぬ、

廿二日、よべのま、雲はれず、くさつをすぎて、瀬田のはしをわたるに、東にはこぶ御茶つぼにゆき逢ひたりければ、かたはらによきてありけれど、なほいかにこつぼもる人々のごがめたるが、あまりにいみじかりければ、

榎のをにつめる木のめのにがさかなみちゆきぶりの人ごがめして、ごなむみそかにおもひつらねつ、行くそらに夕だちすべきさまなりけるを、にはかに風さをひ、雲かさなりて、粟づの、あはた、しう、雨のあしたび人よりはやく、あま衣ざりあへぬまでふり来て、みともの人々もまごにぬれて、大津につかされたまへば、ほどなく暮ぬ、

廿三日、雨はふらねど、雲なほはれやらず、卯の時よりいでたをたまひて、京にのぼらせたまふ、おのれもみどものつらにはあらぬものから、

いまだ夜はあかつきたかきあふ坂やせきのすぎむらかげたどりゆく

今はまたもらぬせきやのどりの音のはからでこゆるあふさかのやま

過ぎぬれば、あけはてぬ、四のみやがはらをへて、松坂をのぼる、日の岡にかげさす朝日もなつかしく、あはた山うちこえて、京の家むら見えわたりたるは、ふるさとの木ずるおぼ

えてうれし、日ごろみめぐみふかく、おほせうけたまはれる、やごごなきみわたりにまゐりて、よろこびまをしなどをへて、まかでぬるついで、あひしれる人々^①がりごひなどするに、又しも夕立して、くれちかくなりぬれば、雨よごひして、伏見におもむく、道のほどくらきに、わらぐつひちにふみなづみつ、やうくいぬすぎて、やどりにつきぬ、わがきみは、夜半ばかりにもや、いたらせたまふらむ、

廿四日、雨はやみぬれど、雲なほごちたり、夕つけて、みふねにのらせたまひ、よど川をさし下す、おのがのれる船は、おくれてこぎいだしつれど、つひにみふねにさきだちて、ながれのまに、下りゆく、日ごろのつかれに、かぢの枕の夢むすぶまもなく、大坂の中の島のかりのみたちのまへなるきしにつきぬ、こ、にやよせむ、かしこにやつながましなど、舟人のいふ聲に目さめて、はまべを打ありく、時のつゝみの數よめば、九つなむならしぬる、舟よりおりて、あづかれる荷ども、お茶やにはこぶ、雨いさ、かおつ、まばしかしこにねつれど、蚊いで來りて、わづらはしさに、ねぶられず、明けはて、おのがやどりにゆきぬ、

廿五日、あかつきより雨ふる、巳の時ばかり、御舟つきぬ、よべはいつものごとく、ひらかたにつなぎぬるごぞ、

廿六日、よべより、いみじうふりまさる、あしたになりて、や、かろく、晝よりはる、いつものごとく、けふはこ、にとまらせたまふ、

廿七日、雨やむ、空はなほはれず、明けていでた、せ給ふ、行ききの川ども、水まされり、されど、みな舟あれば心やすし、ひるになりて、雲はれ、日あつくてる、生田のもりのこなたなる、ゆきかひの道を通るに、こそ見し花の木末ども、青葉しげりて、なつ山のかげくらし、みなと川袖つくばかり、浅き瀬のいさごふみわたりみて、むこのはまなる網屋につかせたまふ、おのれらも、みやどりちかき家にとまりさだめつ、

廿八日、けふもくもれり、須磨すぎで、舞子のはまの松蔭をゆくに、風ひがしのかたより吹て、あまたの舟ども、なにはにこそづなごき、追てにまかせたる帆のまゐるし、九つのほしなるがおほかれば、みふね來れりと、人々よろこびつ、みるまに、いそちかくなりて、ほどなく、あはちをすぎ、あかしのせとにむかふもありしも、にはかにおきくれ、雨ふり來て、舟ども雲きりにかくれゆき、くがには、ひちふみなづみて、行きわづらふ、夕べになりて、かこのとまりにつかせ給ふ、

廿九日、あかつき、いでたちたまはむとするに、川水ふかく、舟わたさざれば、むなしうごまらせたまふ、ひるばかりよりはる、いとくちをし、

晦日、雲なほはれず、けふの辰の時より、舟わたすよしを申す、いそぎいでたちたまふ、里をいではなるれば、やがて川なり、水はまだふかく、舟人さをさしわづらふ、されど、酒井の殿より、か子どもおほくつかはして、みふねやすくわたさしめたまふ、こよひ、姫路にとまら

せたまひぬ、

六月朔日、雲ふかく、こちて、雨ふりいでぬべき、そらのさまなりけれど、さらにもふらず、ひるになりてはる、

家びとはいかにまつらむ、雨はれて照るみなづきも、たちそめにけり、室への道いかるが、かたに、いでたちたまふ、おのれは、いつのうらのかたへものす、道ちかしとてなり、されど、田面のほそ道、みづ所々にたまりて、ふみなづむ、行ききに、かはを三つわたるは、はじめなるは、手野川の末にて、こゝにては、いほ川ごなむいふ、川のこなたのきしより、かなたのきしへ、つなをひきわたして、舟をくりわたる、次なる二つは、正條川のながれの、二またにわかれたるにて、つねのごとく、掉さし渡す、水は何れもふか、らず、いつのうらよりあなたは、山のかたはら、を切ひらきて、新たに作れる道なれば、のぼりゆく坂道に足ふる、いためて、にえわづらふ、道のかたへに、大なるいはごもの、さしいでたるが、くだけちりて、地にしきたればなり、左のかたは、いつのうらまで、ふかく入たる江にて、山のきしうみになだれて、谷そこをのぞむが、ごとく、目もくるめきて、あやふし、けふは、風といふものなくて、あつさえたへず、あへぎつ、こえつくして、室につきぬ、きのふ、まひこにて、みたりし、わがくの舟ども、みなごせく入來つごひたり、里中は、船人に浦人たちまじり、いみじうさわがし、ほごなく、いたりつかせたまひ、いつもの名村が家にまばし立やすらはせ給ふ、夕つけ

て、みふねうるはしうよそひて、のらせたまひやがて、ごもづな解く、貝ふきつゝみかね打
 ならしさを弊をそろへて、こぎいだす、いつものさだめなれば、さこしにつなぎぬ、
 二日、そらきよし、明けはて、みふねいだす、ひる牛まごに汐をまつ、ほどなく、まほかなひ
 て、おひ風も吹來ぬれば、又こぎいだす、うみの上たひらかなり、あづき島をすぐるに、沖の
 かたに、八くりやしまなごのみえたる、おもしろし、犬島をへて、むかふ出ざきにくれてか
 かる、なほあすのおひてをのみねぎてふしぬ、
 三日、や、くもれり、きのふの頃より、み舟いだす、追風しづかにふく、此風ふきつゝかば、あ
 すあさての程には、つるさきにつきなむと云ふ、舟人の言をき、ていごこ、うだのもし
 をぶねこぐさぬきのうみにたつなみのかへるうれしきつくし路のそら、夕日かげか
 くる、ころ、弓削につなぎぬ、三日の秋の月、まぢかき西の山のはに見えそめたり、つねに
 まさりて、あはれなり、こよひ、みふねにどのぬす、
 四日、あかつき、みふねいだす、きのふにひきかへて、風むかひよりふく、ひたこぎにこぎて、
 ひるになりぬ、大泊と云ふに、汐が、りす、小ぶねより、せとの小島に釣し給ふ、此島は、むか
 し、海ぞくのこもりたるそこなりとぞ、今もいしのつひぢのくづれたるが、のこれりとい
 ふ、此處は、はなぐりのせとわきといひて、三島へ續きたる島にて、大三島明神の社へは、山
 づたひに道ありて、一里半ばかりなりと、舟人の語りぬ、かのみやしろには、古代に人々の

をさめし鎧太刀など、あまたありと、はやくより、き、およびつれば、まうで、みまほしか
 れど、わたくしの舟路ならねば、おもひはたさす、いとくちをし、まばしありて、汐よくなり
 ぬ、いそぎ、もとのみふねにかへりのらせたまひ、又こぎ出す、夕つけて、みたらひにか、る、
 みなごの神の祭にやあらむ、はたのぼりたてならべ、はまには、小舟ども、うるはしくよそ
 ひて、にぎは、し、又みふねの、みなごへ入來るをみむとて、おごこをむな、あまたむらがり
 むたり、廣島のこのより、みつかひの舟ども、あまた出されて、うらのものなぞおくりまゐ
 らせたまふ、これも、むらさきのあさからぬ、おほむあはひにつきて、いつもにまされる、ね
 もごろをつくしたまふなるべし、

五日、曉みふねいだす、うみの上なきて、風きのふにことならず、ひるまでこぎて、五々島に
 まほが、りす、夕になりて、又こぐ、漕くらし、まほあしく、みふねす、ますすべなく、なが
 はまのすこしこなたに、いかりおろしぬ、戌のなかばやすぎぬらむかし、
 六日、けふもあかつきより、みふねいだせり、きのふにおなじく、なぎわたりて、かゝみの上
 をゆくこ、ちす、けふは、かならず、つるさきにつかむと、よろこべるに、か子どもの手もた
 ゆくて、みつくえにまばしやすらひて、なほこぐ、ひつじの時過る頃、ふたまとにこぎ入て、
 いかりおろしつ、夕立にはかにして、雨いみじうふり來り、神なりいなびかり、まなこをさ
 へぎり、沖つなみうちよするなごりに、みふねどもゆるる、船人は、ごまふき、いかりおろし

くはへなど、ともへに立さわぐほどに、くれはて、船くつがへるばかりにゆるる、人々ゑひて、きなるいろのものはきくするしみつ、ふなそこにあふれふして、物もおぼえず、夜なかばかりや、しづまりぬれば、からきいのち、いまぞいきかへりたるこ、ちす、

かちまくらゆめもむすばすみづごりのうきねのごこになみさわぐ夜は、あかつきがたになりて、すこしまどろみぬ、

七日、みふねいださす、よべのなごりにこりてなるべし、みな人よべのふなやまひ、やしなはむとて、日ひと日ねつ、ひるのほど、小ぶねより、いそにわたりて釣したまふ、あまども鮑かつぎてみせまわらす、魚と貝とおほく得てかへらせたまふ、よきみご、ろなぐさめなりけむかし、このいそ山にはまをぎとて、あしの葉に似たる草おほし、船人のそのからをとりて、魚をつる糸をむすびつけなどするを、ここの浦にて、未だ見ざるくさなればとふに、其名をはまをぎとも、又はらんぎよくとも云ふよし、答へぬ、なにはのあしはいせのはまをぎといふ、うたのこざわぎは、ひがごとなるよし、はやくいへりける人もあるにつきて、今この草を見ておもへば、からはくれ竹のごとく、葉はあしに似たり、うみべにのみ生ふるくさなれば、はまをぎといふは、うべなりけり、おほよそ、山なるは、やまをぎ、野なるは、のをぎといへれば、この草、萩のたぐひにて、はまにおふるゆゑに、はまをぎといふべし、たゞそのからの、山野なるは、ことなりて、大にして、竹のごとくなるが、めづらしきなり、みの

しよ
ニヤ
カ

の國の赤さか、又かすさのくになどにて、よしつねあそのふることをつけいふ、よし竹といふくさは、このはま萩なるべしとある人のいへるは、さることなりかし、

八日、うすく曇れり、あかつき、みふねいだす、よべより、みふねにこのむしてあり、あけぬれば、風いさ、かふきて、帆をあげつれど、まばしのほどになぎぬ、あるはこぎ、あるはかせにまかせつ、ゆく、ひるすぐるころ、やうく、美佐の川口にむかひぬ、

かへるなみ立やまはなむふなのへにつくしの山もちかづきにけり、このごろの夕立に、川水まさりてにされるみ、さかのせきちかく、南のかたへ、ひとすぢにながれいで、北のかぎり、青き波にて、うみのおもて、ふたいろにわかれたるも、めづらし、みさ府内よりみふねむかふる小舟ども、みをつくしのあたりまで、こぎならべたり、川のつ、みにも、みぎはにも、みふねみむとて、をちこちの里より、ひとおほくきたりつどひたり、みふね、けふはこささらに、めでたうよそひなし、さをうたに、つゝみのおとをうちあはせて、こぎいる、いはむかたなく、うれしくて、そらになみだうくばかりなり、みふね川ぎしにつなぎぬれば、みむかへの人々、御乗ものかきする、うちかこみて、御茶屋に入まさしめつ、はるけきうみの上を、いごとく平らかにこぎわたらせたまひぬる、よろこびまをして、おのがやどりにゆく、いみじうあつくえたへず、あるじは、かしこきたくみにて、おのがいへをも、みづからの手して、新に作りかへたりとて、いときよらなるいへなり、けふめづらしく、われ

をやごしぬとて、さけさかな持出て、あるじしつ、おのれもよくさけのみ、なにくれともの
 がたりするに、いたう肥えふどりたるを、このかほより、玉の如くながる、あせを、おし
 のごひくしたる、かたへよりみるにも、えたへすなむ、このあひだに、あひしれる人々、こ
 れかれとぶらひて、ながき川をのみくらして、夜や、ふけぬ、あすこ、を立ちたまはんと
 のおほせなるよし、つげ來りて、にはかに、いでたちのいそぎす、

九日、くもりてあつし、晝ばかりより、野づ原にいでた、せたまふ、七瀬川、今はたゞ一瀬を
 わたる、水あさく、風なくして、川瀬もさらにす、しからず、はやくきりひらきて、新に作れ
 る川添ひの山かげなる道をつたひて、野津原につきぬれば、申の半過たり、人うまざごひ
 とつにみちて、さわがし、こよひのやどりは、はやくもごまりし、ぶむだといふがいへにて、
 あるじいごまめやかに、ごりまかなへり、こよひ、又人おほくとひて、よべよりのつかれに
 あくこ、ちす、

十日、明けていでた、せ給ふ、坂おほくて、はかゆかず、みごものつらあまたにて、とほらせ
 たまふをみむと、道すがら、人おほくむれあるくろごがうの櫻青葉す、し、ごぞは花さき
 そめし頃なりしをなど云ひて、まばし木蔭に休らひ、水のさむきをのみなどしてゆく、今
 市をへて、こむたつ、みなどの里々を過るに、いとあつし、久住につきぬれば、又人おほく
 たちこみて、にぎは、しさきのふにまされり、げふも里人これかれとひ來、あるじみづか

らのいへにかめる酒とて、さかなそへていだせり、をりしも、岡の城のべより、ごひ來たる
 人ありて、年久しくあはざりしほどの物がたりごもして、のみくふに、又ふけぬ、
 十一日、あかつき、松ごもして、いでたつ、すこし行きて、明けはてぬ、今は火かげもあつし、は
 やけせなどいふ、今日も坂おほし、この頃の雨に、岸のくづれたる、おほくみゆ、ごめかしお
 ほりなどの坂を下るに、山川にわたせる橋ごも、はるとほりたりし時より、石をた、みて、
 からめけるはしに、つくりなさまむごなしあけるを、はやうるはしう作りをへたり、しばし
 ばつくるつひえを、はぶかむとてなるべけれど、所のさまには似つかずなむ、さ、くらな
 みのなどをわけゆくに、あその山のちかくなりぬる、いとうれし、瀧室坂下る頃より、夕立
 の雨しばく、ふり來、坂梨の御茶屋にやすらはせたまひ、ゆあびきよまはり給ひて、あそ
 の神宮にまうでさせたまふ、あらたにみよつがせたまひて、いまだまうでたまはざれば
 ぞかし、こたび、東路の道のながてをつ、みなくいたりつかせたまふかへり、まをしのぬ
 さ奉り給ひ、夕つけて、内牧につかせたまふ、こよひは、おのがやどりとふ人なくて、はやく
 ねつ、

十二日、ぞら晴る、辰の時よりいでた、せたまふ、車がへりのさがしき道をよくとて、山の
 南のかたそばを切ひらきて、新にな、めにのぼる道を作れるにも、すいと平らかに、行
 よし、左のかたは、ふかき谷にて、さきに、はりまの國のいつの浦より、むろへこえし山路に

似たり此道はこたびある人のかしこきことはかりに作れりぞぞかくてはたむけにのぼる人うまの足もいたづきなくて、いみじきいさをなるべし、もこの道ははや行かふ人なくなりて、くさおひたり、そもくるまがへりのつゝらをりなる道は、さがしくて、こえがてなれど、ぶごのくにより、もしあだごもの入來らむをりはいとよきせきなりけるを、あたらしきわざにこそありけれ、たゞしかくをさまれるみよには、さるこゝろづかひも、よしなしとてや、つくりかへたらむ、ごまれかくまれ、けふはこゝろやすく、たむけの家にのぼりつきぬるぞ、何がしの志ふかきなりける、まばしやすらひて、かなたへ下る坂路より、熊本の御城のべちかき山どものみえわたりたる、我家の木末もそこ、なつかしくて、いそぐに、ほごほくおぼえて、なみ杉のうゑ口にいたる、いへより、わが子どもの、こゝにやむかへ來る、かしこにや待ちあると、こゝろ楽しくゆきつくして、大津につきぬ、あにおごふたりの、わかきをの子ども、里中にまちむかへたり、まづうちみるに、何もすこやかにて、おごなるは、こぞのはる、をこになして、立ちわかれつるその折に、おもひくらぶれば、こよなう、たけのびで、見たがふばかりなり、かたみに、かはらぬおもわをあひみて、よろこびのなみだ、さきだちつゝ、うちつれて、やどりにつく、家よりたづさへ來れる、さけわりごなど、どりで、さかづきさしかはし、ひとゝせのほど、つもりしこゝも、なにくれごかたらふにくれぬ、明日はとくいであち給はむごのおほせなりければ、いそぎねつ、

十三日、明けていでた、せたまふをりしも、雨ふりいづ、さきだちていそぐ、大くぼといふあたりにて、雨のあし、まげくいみじう、ふりしきりて、にはたづみ、川のごとく、ゆきかひの道、ひとつにながれて、のれるものも、うくばかりなるを、かけるをのこらの、こしなづみつつ、わたりゆく、いとくるしう、行くさきなほいかならむと、心ぼそう覺ゆ、あその三のみやうつせる社のまへ過る頃より、雨よう／＼、かろくなりて、二軒屋につきぬれば、やみぬ、いへより、ことし八つになるすゑのをのこ、こゝまでむかへに來り居たる、わらはがみを、ひとつもとゞりにゆひあげたるおも、ち、又見たがふほどになむ、家よりもたせ來れる、さけさかな、どりでさせ、のみくふ、人々の家よりも、おなじう、むかへ來れり、こゝにて、やつれしたびよそひどもぬぎかへて、龍田口にいたる、みたちまでの道すがら、みむかへに出たる人々、おほくむらがりゐて、わきてにぎは、しく、午時すぎて、つかせ給ふ、
あらし山かしこきうみもたひらけくつかへ來にけるけふのうれしさ、時はもむせうの十まり一とせといふとしになむ有ける、

附

録
を
は
り

明治三十六年十一月二十日印刷
明治三十六年十一月廿五日發行

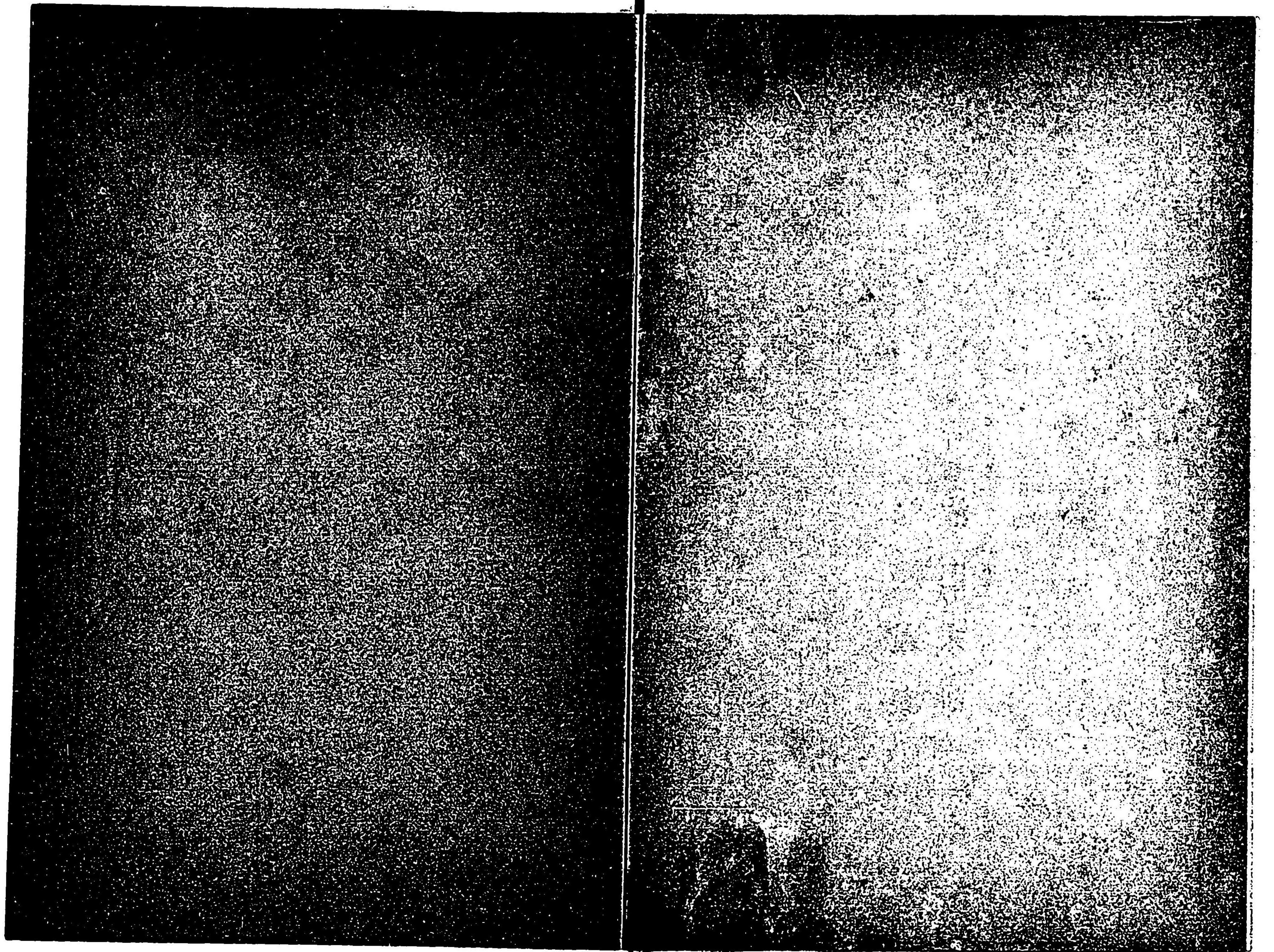
非賣品

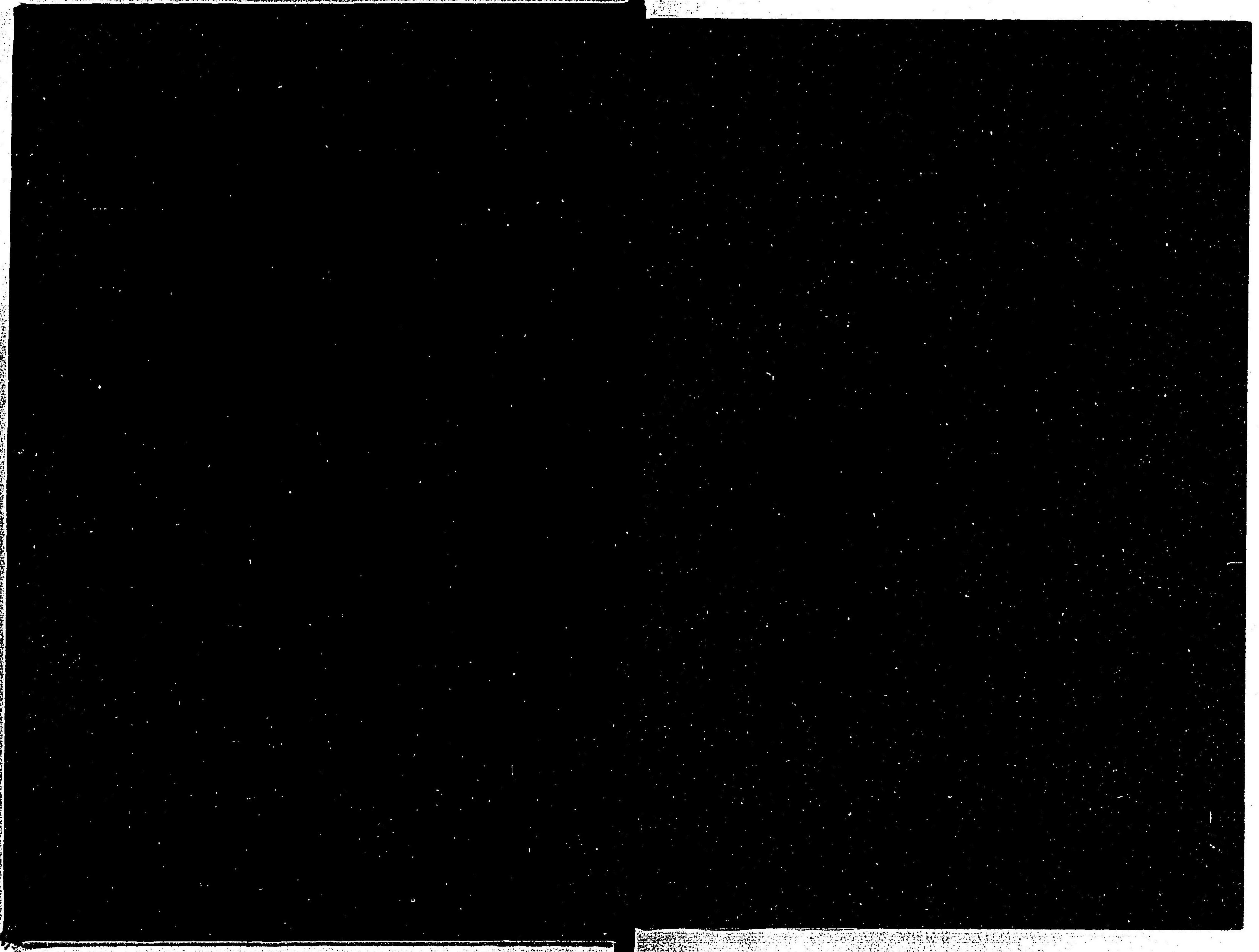
池邊義象
池田末雄
謹編

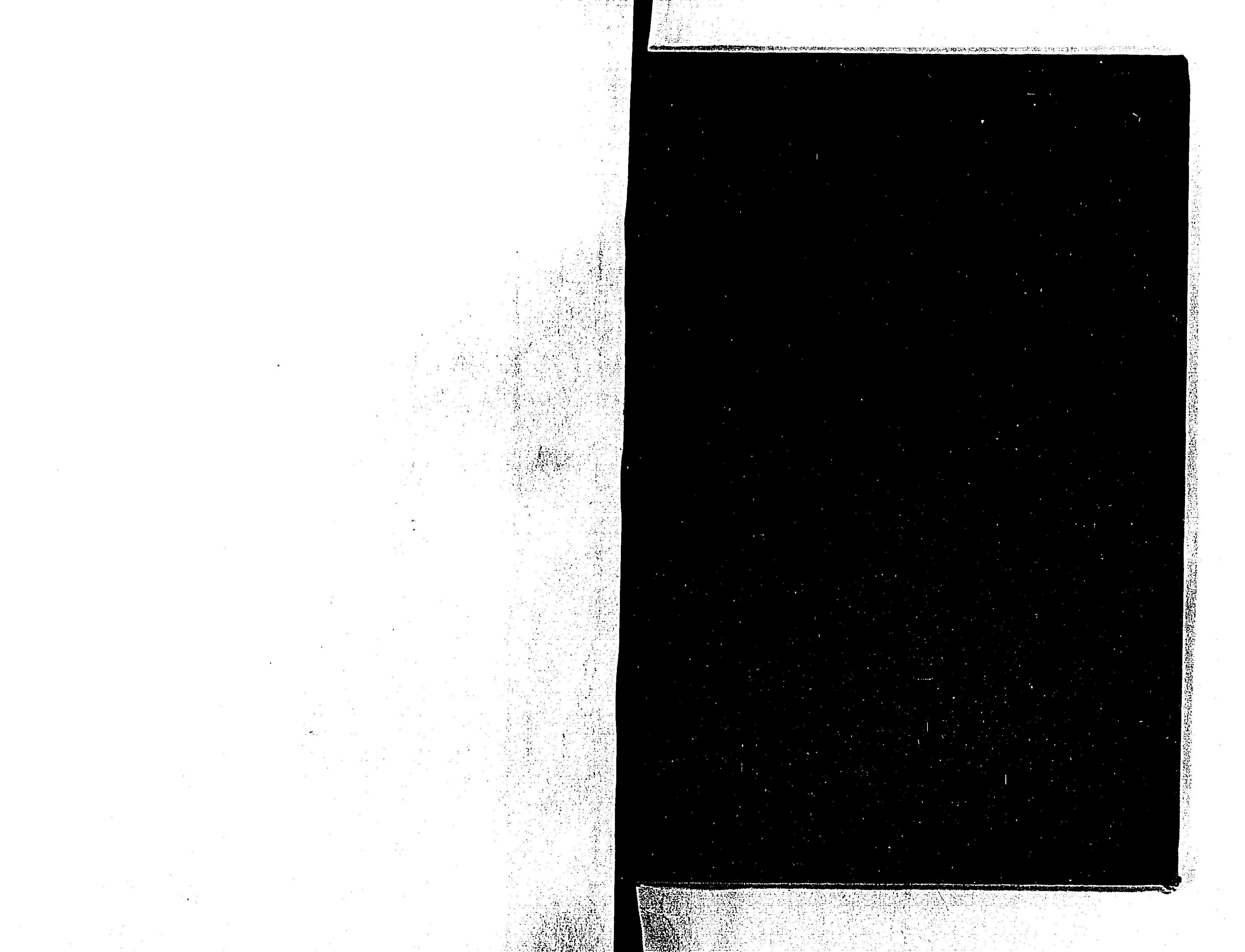
發行
者兼

吉川半七

東京市京橋區南傳馬町
登丁目十二番地







086751-000-0

911.158-H718yI

陽春集

細川 齊護/著

M36

DBD-1964

